

総(情)-72-1

メ
キ
シ
コ
の
水
産
業

メキシコの水産業

—開発途上国の水産事情—

昭和47年5月

海
外
技
術
協
力

515

89

KA

LIBRARY

海外技術協力事業団

総務部

國際協力事業団

受入 月日	'84. 4. -7	615
登録No.	02702	89
		KA

は し が き

海外技術協力事業団は、開発途上諸国の水産事情をシリーズとして刊行し、これまでタイ、セイロン、イラン、およびインドネシアの4編を出してまいりましたが、今回はその第5編としてメキシコをとりあげました。

開発途上国の水産業に対するわが国の技術協力は、これまでインド、セイロン等におけるセンター設置をはじめ、研修員受入51ヶ国991名、専門家派遣29ヶ国325名、さらに地域協力の一環としての東南アジア漁業センターに対する協力等極めて多様かつ大量にのぼっております。従ってその間に蓄積された資料も少なからぬものとなり、そのいくつかはすでに報告書として逐次発表されてまいりました。

本シリーズはこうした経験をふまえ、水産庁関係者および派遣専門家の協力のもとに新たな総合的観点にたって、围別資料としてまとめ、関係各位の業務の参考に供しようとするものであります。

もとより執筆者の専門によって、内容、各項の間に精粗のあることは免れませんが、その点は今後順次補ってゆく予定であります。

なお、本インドネシア編は43年11月より46年11月までの3年間中南米計画漁業専門家としてメキシコに勤務された居城力氏に執筆していただきました。

最後に本シリーズの刊行のため、ご協力を賜った水産庁関係者各位に対し厚く感謝する次第です。

昭和47年5月

海外技術協力事業団
総務部長

JICA LIBRARY



1052965[9]

目 次

第一章	メキシコという国	1
1.	序 文	1
2.	人文地理	1
3.	政 治	4
4.	経 済	8
第二章	メキシコの水産業	12
1.	概 観	12
2.	魚類の名称	16
3.	地域別水産業の実態	23
4.	漁業者数	30
5.	漁 船 数	31
6.	太平洋側の漁業	33
7.	太平洋側の漁港	37
8.	メキシコ湾の漁業	38
9.	メキシコ湾側の漁港	41
10.	エビ漁業	43
11.	エビ漁業の資源と漁場	46
12.	エビ漁業の漁具漁法	48
13.	漁業協同組合	50
14.	消 費	51
15.	輸 出 入	54
16.	実態調査報告	56
17.	結 言	78
	参 考 文 献	86
	地 図	87

第一章 メキシコという国

1. 序 文

ラテンアメリカの最北部に位置するメキシコという国について、日本人の多くの人々は未だ正確な認識を余り持っていない様である。例えば、メキシコは「アスタマニャーナの国」とよく云われているけれど、長期滞在を経験して来た私に云わせると、事実は必ずしもそうではない、と強調したい。メキシコはたしかに、遠くて近い国である。メキシコ合衆国の元首、エナエベリア大統領が、就任以来最初の外国訪問の国を日本に選び、1972年3月に来訪している。テキーラ、マリファナ、斗牛、ピラミット、サボテンなどの印象で緩られるメキシコに対する私の映像は、水産業の発達振興という命題に焦点を合わせる時、これ等の太陽と情熱で代表される諸印象とはまるで異質の、別な、寧ろ暗くて冷たい、数多くの社会的矛盾、例えば、高遠な理想と深刻な現実とのずれとか、貧富の大きなへだたりだとか、進歩と後退の共存などといった後進性、無知、貧困で代表される、これら社会的な諸条件のもとにおいて、その発達振興の可能性を、確信をもって追求しながら、政府に対し勸告や助言を提案して来た私は、今ここにこれからメキシコの水産業について具体的に筆をすすめていこうとする前に、メキシコという国の現状が果してどのようなものであるかについて、正確な認識を、読者諸賢とともに持ちたいと思ひ。

2. 人 文 地 理

シエラマドレ山脈が南北に縦走し、国土の大部分は山と高原地帯におおわれ、従って、国土全体の平均高度は、海拔約1,800米である。水産上における地理的区分は、この国土を、マサトランの線をもって、南北メキシコにわけている。メキシコは北緯14°—33°より32°—43°の間に存在し、中南米20ヶ国の中で第3位の面積を持ち、日本のその約5.3倍に当る。領域の中は、北方のアメリカ合衆国との国境で2,300軒、南方の英領ホンジュラス及びグアテマラ共和国の国境では800軒、そして一番細いところ即ち、太平洋側のテウアンテベック湾とメキシコ湾との間は、僅かに220軒に過ぎない。

国土の北半分は、砂漠状の地帯が多く、雨量500ミリ以下の乾燥地域で、昭和44年8月メヒカリ地方に熱波が襲来し、52℃に達し、死者94人を出した。南半分の、メキシコ湾側の低地は高温多湿で、雨量は非常に多く、毎年9・10の両月で800ミリ以上にも及ぶ。国土の半

国	面積	人口	平方軒当り人口
メキシコ	1,963(千平方軒)	5,000万人	25人
日本	370 "	11,000万人	300人

分以上は、北回帰線の南に在る所謂熱帯国に属しているにも拘わらず、その大半が平均1,800米の高原地帯であるため、熱帯地方では海拔高度が高まるにつれ気候がやわらぎ高原の人口密度が平野に比べて高い、という地理上の原則どおり、海拔2,240米の高原に位置する首都メキシコ市は平均気温15℃、人口750万人を有するラテンアメリカ最大の大都市である。住民はスペイン系の白人と原住民のインディオとの混血が35%、原住民が54%で、このことは、インディオの血統をうけているものが89%を占めていることを意味する。

1970年度における人口構成

総人口は、4,838万人(100%)、そのうち都会に住む人口は、2,833万人(58.6%)、地方に住む人口は、2,005万人(41.4%)である。経済活動に従事する人口は、1,295万人(26.8%)で、その内訳は次のとおりである。

農・牧・林・漁民	511万人(39.5)
サービス関係	330 "(25.5)
製造業者	217 "(16.7)
商業関係	120 "(9.2)
建設関係業者	57 "(4.4)
運輸関係	37 "(2.9)
鉦民	18 "(1.4)
電気通信関係	5 "(0.4)
合計	1,295 "

メキシコの人口動態には、著しい2つの特徴が挙げられる。

1. 人口増加率が非常に高く約3.3%である。

1960年の総人口	3,493万人
1970年の総人口	4,838万人
10ヶ年間の増加人口	1,345万人

1980年の総人口推定……6,700万人

2. 都会に住む人口が急激に膨張している。

都会に住む人口の百分率

1960年……50.7%

1970年……58.6%

メキシコでは、大部分の家庭が月収3,000円以下の低所得者で、これ等の人達は、品質などは気にせず、安いものなら何でも飛びつくという慣習が強い。例えば、フカの肉を1キロ50円で売り出した時、僅か30分の間に、500キロの肉を売り果してしまった。要するに、安いと云うことであれば、魚種などは全く問題ではないのである。然し一般に、現状は、魚といえ他地球上の開発途上国(ナイフとフォークで食事をとる国)に共通の現象として、それはもっぱら大都市の、中産階級以上の裕福な家庭のみに消費される贅沢品の一つである。レストランのメニューの中には魚の料理が常に王座を占めている。獣肉より安くなるのでなければ、魚肉は貧困な所得層の大半を占めている国民の大衆的な食料品とはなり得ないであろう。

地理的に豊かな土地、貧しい土地、緑の谷、砂漠が陸上に存在していて、これ等は、生産に関する限り、一定の地理的条件の下で、計画的生産が可能である。然るに、これに対し、海の中は、魚類の生産に関する限り、決して一定していない。海岸線が長いからといって、必ずしも、より豊富に魚類が生産されるものとは限らない。又陸上が砂漠であるからといって、そこから続く海の中も、同じ様に砂漠であるとは限らない。メキシコの海岸は砂漠の様なところどころにあるが、海の資源は決して不毛ではない。メキシコには、正確な漁獲統計が不備であるから、実際の生産状況は勿論、資源の生産力、population dynamics 漁業盛衰の判断などの、学術的な研究作業について、あきらめざるを得ない。

3ヶ年間、毎日2時間毎に気温を、メキシコ市とラバス市において観測した結果が次のとおりである。但し午前2時、4時、6時の3回分は、しばしば睡眠のために観測は出来なかった。

1. 一日中で、最も低温が観測されたのは、午前6時で、最も高温が観測されたのは、午前3時半前後であった。

2. メキシコ市における観測結果

(1) メキシコ市内は殆んど毎月雨がある。

(2) 然し11~3月中旬までは殆んど雨が無いといってよい。雨の多い月は6~9月で、7・8の両月は特に雨が多い。

(3) 一番暑い月は5・6の両月で、一番寒い月は12・1の両月である。

(4) 3ヶ年を通じ最も寒かった日と気温は、12月15日午前6時の5℃及び1月7日午前6時の5℃であった。

(5) 3ヶ年を通じ、最も暑かった日と気温は、5月7日午後3時の33℃及び6月11日午後3時半の33℃であった。

3. ラパス市における観測結果

(1) ラパスは明瞭に雨期と乾燥期の区別がある。

(2) 雨期は6～10月で、乾燥期は11～5月である。

(3) 一番雨の多い月は8月である。

(4) 一番暑い月は、7・8の両月で、寒い月は12・1・2の3ヶ月である。

(5) 3ヶ年を通じ、最も寒かった日と気温は、2月26日午前6時の9℃で、最も暑かった日と気温は8月1日午後4時の40℃であった。

私の記録ではないが、メキシコ湾に面するGoatzacoalcos (ゴアトサコアルコス) 港における気象観測記録を転記してみると次のとおりである。

(1) 雨期と乾期の区別は明瞭で、雨期は6月中旬～10月中旬で、他は乾燥期である。

(2) 特に1～6の5ヶ月間は全く雨が降らない。

(3) 11～4月は北風(NORTEノルテ)が速吹き、漁業の操業を著しく妨げる。

3. 政 治

メキシコは中南米諸国の中で、その政治及び経済が最も安定している国家である。長い内戦時代の後、1929年(昭4)、立憲革命党(PRI)が創設されて以来、PRIは43年間に亘って政権を握っている。カルデナス将軍が安定政権を樹立して以来、6年毎の任期をもって今日までカルデナス将軍及び現大統領を含め7名の大統領が就任している。

歴代の大統領

1934(昭9)～40	カルデナス将軍
40(和15)～46	カマチヨ
46(昭21)～52	アレマン
52(昭27)～58	ゴルティネス
58(昭33)～64	マテオス
64(昭39)～70	オルダス

水産業の発展のために、特に基礎的な政策を立案実施した大統領は、1958年(昭33)に就任したロベス、マテオス大統領であった。

政情が安定しているということは、いかなる国においてもその国の経済開発を進める上で最も重要な条件の一つになっているが、経済成長率が年率6%で推移していることを可能ならしめている要因がこの政情の安定にあることは無視出来ない。メキシコ合衆国は、立憲民主主義制にもとづく、29州、2準州(連邦直轄領)及び1連邦区(首都)で構成されている。現憲法は

1917年に公布されたものである。大統領は国の元首であると同時に、行政府の首班でもあり、又、軍の最高司令官でもある。大統領の再選は認められていない。大統領が代ると、幹部クラスは全部退陣する。このことは、日本では絶対に考えられないことで、果してこれによいものかどうか、いろいろ問題があろう。国会は上院と下院の2院制である。政府行政府の内部構造は、14省、4府庁である。

- | | |
|-----------|----------|
| 1 大蔵省 | 1 連邦府行政庁 |
| 2 海軍省 | 2 農地局 |
| 3 文部省 | 3 観光局 |
| 4 商工省 | 4 総理府 |
| 5 農業畜産省 | |
| 6 社会労働省 | |
| 7 国有財産省 | |
| 8 水力資源開発省 | |
| 9 建設省 | |
| 10 通信省 | |
| 11 厚生省 | |
| 12 国防省 | |
| 13 内務省 | |
| 14 外務省 | |

水産行政は、商工大臣の所管で、大臣の下に、商業、工業、水産の、三次官がいる。水産行政機構は次のとおりである。

商工大臣	カルロス・トレス・マンソ
水産次官	エクトル・メデナ・ネリ

企画部長奨励局長	アルフォン・マガヨン・デ・ラ・ベガ
地域行政局長	ラファエル・ベガ・リバス
技術局長	サビエル・メンドサ・フォン・ボルステル
国立水産研究局長	ルイス・カスガ
教育協同組合局長	アルテュロ・ディアス・ロホ
テベパン国立冷凍庫	アルフォンソ・エルナンデス・アルバ
ロドリゲス漁業公社	ラウル・ラミレス・フンケ
エスタタル漁業公社	エドガルド・メディナ・アロンソ

メキシコ合衆国の外交は、中立主義を原則とし、その政策上の二大原則は、内政不干渉と民族自決である。基本的には、自由民主主義国としての立場を維持しつつ、同時に共産圏諸国とも外交関係を保ち、ソ連、ポーランド、チエコスロバキアなどと、それぞれ大使を交換しており、また、アメリカが国交を断絶しているキューバとは、外交、経済関係を維持、メリダにはキューバの領事館が置かれている。メリダの空港には、アメリカのマイアミの新聞と、キューバの新聞が仲よく売店で売られているのも面白い。

メキシコが今日、ラテンアメリカ諸国の中で最も重要な地位にのしあがって、然も尚、着々と独自の建設を進め、その将来が強く期待されているのは、民族の素質そのものがすぐれているばかり、独立と革命の達成によき指導者を得て、後継者の養成に留意したためであるといわれている。特に、半世紀に亘る教育改善の実は誠に大きい。歴代の大統領の教育に対する不断の国家的努力による中堅人材の働きかけの結果であろう。教育という無形の投資に、メキシコは、先進国に決して劣らぬ莫大な国費を投入し、10年以上も前の1960年の時でさえ、歳出の20%を占めていた。当時(昭35)の日本のそれは僅かに11%、アメリカの29%に次ぐ世界第2位の高率であった。「一本の木を育てるのに10年かかるが、人間一人を育てあげるには、50年かかる。それは一生の大仕事である。」と、メキシコ政府文部省の或る高官が私に語っていたのをよく覚えている。日本の東京帝国大学(明治大正時代における)に匹敵する、エリートのための国立大学(所謂最高学府)として、メキシコにも、メキシコ国立大学が、メキシコ市内に在る。学校は市内の観光ルートの一部に入っている有名を美しいところで、大学卒業生は、リセンシアードとか、インヘネロとか社会的に呼ばれ、特別扱いをされている。大学の学生数11万という所謂マンモス大学で、入試はやさしいが、進級や卒業が難かしいことは、日本の大学とは正反対である。そのせいか、大学卒業生の実力は、一般に、社会へ出たあとでも失うことなくしっかりと身につけており、知識に関する限り、実によく覚えているのに驚く。開発途上国に共通な世界

的現象の一つとして、どの国にも、国立の最高学府の大学があり、国の将来を背負っている有為な人材群が必ずそこにはいる。そして、それにも拘わらず、どうしてその国が、依然、後進性、無知、貧困などの殻の中からいつまでも脱皮し得ないのか、不思議な問題である。この疑問に、然し、エリート達が次の様に答え、そして訴えていることも、世界共通の現象のようである。曰く“政治が悪い”、曰く“組織が悪い”と。メキシコ合衆国に関する限り、果して政治や組織が悪いのだろうか。6年毎に全部首脳部が入れ替ってしまう様な機権に、問題はないてであろうか。1972年3月の日墨両国政府の公式共同声明の中に、「マンサニーヨ港の施設の改善のための借款と技術協力を実現させる」、ことがとりあげられているが、実は1969年の夏、私はそのマンサニーヨ港を一望の視野の中に臨み得る小高い、とある丘の上に立っていた。それは前大統領の時代であった。私がそこにみたものは、港の一隅に、目下工事が進行中の一面と、ずっとそれより反対の方角にも、もう一つの、工事をかばでやめてしまったかと思われる工事あとの一面であった。案内してくれた人の説明によると、工事進行中のものは、現政権によるもので、工事あとのものは、前政権に属するものであるとのことであった。6年間の大統領の期間中に、その工事がもし完成されなかった場合は、同じ港の中に二つの同じ工事がすすめられるわけである。日本人の常識から考えて、それは凡そ不経済な話であろう。

政府が熱心に教育のための努力を傾けているにも拘わらず、依然、中堅指導者層の技術者は非常に不足している。特に水産業に関する限り、その不足は極端で、大袈裟に言って皆無であるというのが偽りのない実態である。そのよって来たる原因というのは極めて単純なことで、要するに、技術者を教育することの出来る技術者がいない、ということである。仮りにもしマンモス大学の中に、水産学の講座が設置されたとしても、学生達を教えることの出来る教授陣が果して充実出来るものかどうか。況んや、実業教育に属する水産教育機関として、実習船や調査船や試験船や研究船を持たなければならないということになれば、ますますその実現性は厚い壁となる。

メキシコ合衆国の二大国策は、国民教育の振興と、自国産業の育成である。この両方面から、国家と国民を大きく育てていこうとする懸命な努力が支払われているが、次に挙げる様な、内在する大きな矛盾に、当局は悩まされ続けている。

1. 豪華な都会地の生活があるかと思えば、その裏街では、悲惨な生活が何代にも亘って続いている。両者の所得の較差は余りにも大きい。
2. 政府が経済面でしめる役割が、民間人に比べて余りにも大きく、自由競争による発展が著しく阻害されている。
3. 資本が非生産的なもの、不急なものに流れすぎている。

メキシコ合衆国の人口増加率は世界一であるからメキシコの人口が10年後には七千万人を超えることは必至であると、統計学者は断定しているが、これに対し、現在の水産政策が、ただ単に輸出エビの関連産業のためにのみあるというのでは、急速に膨れあがっていく人口に対する食糧問題の解決は出来ない。

あらためて、水産物の生産、流通、消費について、積極的な解決の方法を立案、実施しなければならぬ瀬戸際にたたせられており、それは好むと好まざるとに拘わらず、最早避けることの出来ない対決の時期に達したわけである。

1. 漁獲量の増加は可能か。可能ならば、どうやって増産させればよいか。
2. 流通の経路は何か。厚い壁を取り除く方法は何か。
3. 漁獲物の取扱方法、輸送、貯蔵方法について改善するところはどこか。どの様にして改善するか。
4. 消費者は臭くて高い魚を買わない。
5. 漁業者は、魚はたくさんいるが売れないからとらえ、と訴えている。

要するに、水産政策は依然未熟のままである。国策である自国産業の育成の焦点を工業化にあてている当局が、水産政策に対して編み出している三原則は次のとおりである。

1. 外貨獲得のための輸出商品の産出。
2. 国民の食糧問題解決のための増産。
3. 失業救済のために漁業者に職を与える。

4. 経 済

メキシコ合衆国はいま、ラテンアメリカ域内の先進国として、積極的に経済開発と取り組んでいる。国民総生産は同地域内のトップで、全体のその約25%を占めている。第2次世界大戦以降、メキシコの一般経済は着実な発展を遂げ、国民総生産額において世界第9位にのしあがり、尚、高い成長率をもって成長を続けている。然しこの様な経済発展が必ずしも国民一般の生活水準の向上をもたらしているとはいえず、低所得に喘ぐ多数の農民や労働者の姿は依然そのまゝであり、全労働人口の約20%が絶えず慢性的な失業状態にある。全経済活動人口中の約四割が最低賃金の受給者である。年々急速に増加する人口の生活水準を向上させる唯一のキメ手は、工業の振興にある、と政府はみている。第二次世界大戦を契機として、メキシコを代表していた農業は次第に影をうすくし、反面工業化が飛躍的に発展したことは、顕著な事実である。軽工業の

分野では、食品、繊維、雑貨などは既に自給自足の体制に入っている。

そして当局の重点は、鉄鋼、石油化学、自動車などの重化学工業の方向へ注がれている。

然し尙依然、農牧畜水産業は経済活動人口の半分近くを擁し、輸出総額の半分以上を占めている。経済活動の重要な分野であることには変りはない。農業の主要生産品は、トウモロコシ、小麦、コーヒー、棉、砂糖、サイザル麻などで、主食であるトウモロコシは自給が間に合わず、輸入されている。サイザル麻の産額は世界供給量の50%以上を占めている。牧畜業の生産は1970年度の統計から引用すると次のとおりである。

1972年度における牧畜数

家 畜	15,656万羽
家 畜(牛類)	2,512万頭
豚	1,172万頭
山 羊	847万頭
綿 羊	532万頭

メキシコ経済の苦悩は、貿易及び国際収支の面で、深刻な様相を呈していることがわかる。

輸 出

輸出は、第一次産品中心で、主要輸出品目は次の通りである。(1970年度)

1. 綿 花	82(百万ドル)
2. 砂 糖	90 "
3. コーヒー	71 "
4. エ ビ	63 "
5. ト マ ト	35 "
6. 硫 黄	16 "
合 計	1,368 "

輸 入

輸入品目の80%以上が、資本財(特に産業機械)及び原材料で、残りの大部分が耐久消費財である。(1970年度)

1. Machinery	527(百万ドル)
2. 自動車,トラック及びその部品	202 "
3. electronic goods	167 "
4. organic chemical	142 "

5. iron and steel products	80 (百万ドル)
6. 鉄道 equipment	59 "
7. synthetics and plastics	43 "
8. Natural rubber	19 "
synthetic latex	
合 計	2,456 "
BALANCE	1,088 (百万ドル) 輸入超過

日本との貿易は、毎年輸出超過で、主要輸出品目は、綿花、トウモロコシ、塩、冷凍エビで、その大半は綿花である。綿花は天候不順のためにその収穫は非常に不安定である。日本からの輸入品目は、一般機械類、化学製品、鉄鋼、繊維品等で、慢性的な輸入超過に喘いでいるメキシコとしては、出来る限り輸入を抑制しなければならない。

メキシコ合衆国に対する日本の企業投資は、1971年3月現在において29件(2,500万ドル)で、外国資本投資総額の僅か1%程度に過ぎない。これに対し、アメリカの投資額はその70%を押え、貿易面でもアメリカは、輸出入とも全体の3分の2を占め、大統領をして、アメリカ一辺倒である、と嘆かせている。経済面におけるメキシコ合衆国の最大の悩みは、余りにもアメリカの影響が強過ぎることで、1971年8月のニクソン声明による突然の輸入課徴金で、メキシコの政財界は深刻な衝撃を受け、対米一辺倒では駄目だ、というにがい教訓を得た。メキシコにとってアメリカに次ぐ輸出の相手国であり、世界のエコノミック・アニマルである日本に期待をかけるようになって来た。1972年3月、来訪したエテベリア大統領は、その共同声明の中で、「農業・漁業・鉱業・通信事業の分野で日本との合併事業に参加し、両国の実業家が共同投資を行なうことを支持する」と声明し、「メキシコと日本との間の貿易に第三者が介入している現状を改善したい」、と同大統領は明言している。例えば、メキシコから日本へ輸出されているエビは、アメリカ資本家のトンネルをくぐって行なわれて来ている現状であるが、もしこの様な第三者アメリカの介入をなし、直接日本の業者の手によって日本へ輸入されることになるならば、画期的な改善の段階に入ることになるわけである。現在、エビは綿とともに日本への輸入品目の二大横綱であるが、綿が他の品目と同様に、必らずしもメキシコからでなくてもよいわけであるのに対し、エビは日本とメキシコ両国の資本による合併方式で、安い賃金によって生産される、コストの低いエビを日本へ輸出させ得るならば、その輸出量の増加は双利共生の實をあげ得るだろう、との見地から、メキシコのエビは本命であろうと考える。

メキシコ合衆国は外国為替を自由にし、国際取引に安定をもたらし、外貨の収入を促進せんが

ために、為替管理を行わない政策をとっている。日本への送金は、常に自由である。

たとえ国際収支が悪化した場合でも外国為替の管理はあくまでこれを避け、関税の引上げや、輸入制限の強化とともに、ペソの引下げを実施し、その打開策を講じて来た。そのため、今日、メキシコの通貨ペソは中南米諸国の中で最も安定している。慢性化している輸入超過の穴を埋め合わせ黒字にしている花形が観光収入である。観光収入の中で絶対に無視することの出来ないものに sport fishing がある。これは主に曳縄 trolling の遊びで、その対象となる魚種は、カジキ類を筆頭に、マグロ、サメ、シイラ、カツオ、サワラ、カマスなどである。

sport fishing によって捕獲されるカジキ1尾を、観光収入に換算してみると、約500ドルに相当する。仮りにもし、1尾のカジキの重量が50キロであったとすれば、500ドルのカジキは100グラム当り500円となる。その様な高価なカジキを商業ベースに乗せることは到底不可能であるから、sport fishing を大いに奨励し、1尾500ドルに相当する観光収入を手に入れることの方が政府にとっては得策に相違ない。それよりも一番不経済に思われることは、こうして折角、釣りあげたカジキが空しく、海中へ捨て去られてしまうか、或は、岸壁の上で放置されてしまうことである。それは、人類全体の貴重な動物蛋白質源が空しく失われてしまう、ということではないだろうか。

第二章 メキシコの水産業

1. 概 観

メキシコ合衆国の水産業は、産業として未だほど遠い感が深い。前大統領時代の水産庁長官は次の様な所感を私に語った。

1. 漁民の生活が気の毒である。
2. もっと魚を食べて欲しい。

メキシコ合衆国歴代の大統領の中で、水産業の発達振興に対し、特別に積極的な意欲を燃やした人は、マテオス大統領(昭33~39)と現政権のエナエベリア大統領(昭45~51)であろう。エナエベリア大統領は、自分の子息の一人を日本の水産大学へ入学させようとしている。マテオス元大統領は、次の様な基礎的な政策を立案実施した。

1. 国内消費増大のため的一大キャンペーン。
2. Comision Nacional Consultiva de pesca 漁業諮問委員会の設立。
3. Instituto Nacional de Investigaciones Biologo-pesqueras 水産生物調査研究所の設立。
4. 漁業者に対する教育を促進し、生産技術の向上をはかり、生活を安定せしめる。
5. 漁業協同組合の改善
6. 養殖事業の奨励

エナエベリア現大統領(昭45就任)は次の様な水産業に対する基本的政策を明らかにしている。

1. 輸出貿易をさかんにし、外貨を獲得する。
2. 国民全般に低廉な動物性蛋白質源としての水産物を豊富に供給する。
3. 漁業者に出来るだけ多く職を与え、生活を豊かにし、失業者を少なくする。

メキシコ水産業の代表といえばエビ漁業で、エビは綿とともに重要な輸出品である。過去18年間を通じ、エビ漁業のみが順調な発展を続け、他の漁業は、或は衰え、或は栄え、不安定な傾向をみせている。勿論、総漁獲量に占めるエビの地位は筆頭で、マグロ類の生産がようやくこれに追い迫っている。水産業を語る上において、統計資料とともに説明をすすめていくことが一番よい方法であると思われるので、総漁獲量の統計を初めて紹介する。誌面の都合上、1953年度、1958年度、1963年度及び1970年度(最新)の4ヶ年度についてまとめてみた。

1953年度における総漁獲量

	総漁獲量	112,354トン
筆頭	マグロ類	49,788〃
2位	エビ類	19,671〃
3〃	カキ	6,883〃
4〃	カツオ	6,177〃
5〃	マイワシ	4,717〃
6〃	イシナギ・ハタ類	3,497〃
7〃	スズキ	2,662〃
8〃	サワラ	2,514〃
9〃	アワビ	1,626〃
10〃	ブリ	1,210〃

1958年度における総漁獲量

	総漁獲量	160,546トン
筆頭	マグロ類	51,498〃
2位	エビ類	31,454〃
3〃	カツオ	17,134〃
4〃	マイワシ	14,848〃
5〃	カキ	11,082〃
6〃	イシナギ・ハタ類	4,423〃
7〃	サワラ	3,108〃
8〃	アワビ	2,875〃
9〃	ニベ	2,122〃
10〃	サギ	1,527〃

1963年度における総漁獲量

	総漁獲量	172,031トン
筆頭	エビ類	43,354〃
2位	マイワシ	19,356〃

3位	カキ	17,687トン
4〃	マグロ類	15,353〃
5〃	イシナギ・ハタ類	9,572〃
6〃	カツオ	5,031〃
7〃	サワラ	3,855〃
8〃	アワビ	3,479〃
9〃	タイ類	2,736〃
10〃	サギ	1,844〃

1970年度における総漁獲量

	総漁獲量	255,900トン
筆頭	エビ類	42,872
2〃	マイワシ	35,306
3〃	カキ	32,764
4〃	マグロ類	10,681
5〃	イシナギ・ハタ類	8,718
6〃	サバ	6,665
7〃	タイ類	5,562
8〃	アンテヨビー	5,441
9〃	ウミガメ	4,170
10〃	アワビ	2,818

一番新しい統計（1970年度）によれば、筆頭は、エビの4万3千トンで、次はマイワシの3万5千トン、次いでカキの3万3千トン、マグロ類の1万1千トン以上の漁獲を挙げている魚種は、以上のエビ、マイワシ、カキ、マグロ類の4種である。メキシコには信頼に値する統計数値蒐集の組織が不完全であるから、数字そのものが必ずしも実情を代表しているとは限らないが、相対的な比較論評の材料にはなし得るだろう。1963年以降における統計をみても、上位を占めているものは、前記の四種で、その順位も変わっていない。1963年頃から上位のランクから転落していったカツオが1953年頃既に上位の中に座を占めていたことは注目し値する。このことは、カツオに代ってマイワシが登場してきたことを意味し、それは恐らく、資源量の動態の方に原因があったのではないかと想像される、何れにせよ。メキシコ合衆国における

水産業の大きな特徴は、今日までのところ、エビ漁業だけが独走的発展をとげ、他の漁業はあまり発展しなかった、ということで、輸出品目の中で重要な地位を占め、メキシコ政府の財政上絶対に欲しい外貨を非常に沢山獲得してくれるエビのために、エビの関連産業以外のものにあまり開発の手を伸ばそうとしなかったし、技術的にも伸ばす余裕がなかったというのが実情であろう。即ち、前記の、上位を占めているエビ、マイワシ、カキ、マグロの四種類の生産は、技術的にいって、近代的な漁具漁法によって生産されるもので、優秀な漁船、能率的な漁具が、腕のよい漁労長の指揮監督下で使用されなければならない、エビのトロール、マグロ、マイワシのまき網の操業によるものである。資源的には、底魚資源であるエビ類がメキシコの大陸棚に豊富に生息しそれが良好なトロール漁場を、メキシコの水産業に与えている反面、回遊性資源であるマグロとマイワシは、良好な漁場の発見という点において、試験船も調査船も持たない政府の、これまでの漁場開発に対するやり方には問題があるろう。

前記の、総漁獲量は、次の方程式によって算出されたものである。

$$\text{Total} = \text{Eatable} + \text{Industrial}$$

Eatable fish は食用魚全般を含み、Industrial には次の加工品などが含まれている。

1. 海 藻
2. 魚 粉
3. 肥 料
4. 毛 皮
5. 乾燥テングサ
6. サメ肝臓
7. サメ皮
8. 魚 油
9. その他

最近3ヶ年の総漁獲量の内訳を紹介すると、次のとおりである。

Catches of major species (単位千トン)

	1968	1969	1970
Total	240.0	232.7	255.9
Eatable	194.4	185.6	202.7
Shrimp	36.1	32.1	42.6
Oysters	24.5	32.3	32.8
Sardines	27.9	30.0	36.0
Anchovies	15.9	4.3	5.4
Industrial	45.6	47.1	53.2
Seaweed	28.2	26.7	29.2
Fish meal	11.4	14.9	19.5

2. 魚類の名称

メキシコ水域に生息する魚類は600種を超えるといわれているが、生物学的な分類を全体的に完成している文献或は信頼に足る資料は非常に乏しいので正確には不明であろう。

メキシコ産魚類は、日本の魚類名称をそのままあてはめることの出来ない種類があるので、類似の family の名称をつけて整理するより任かに方法はない。カリフォルニア湾内で特産する totoaba (トトアバ) という魚は、世界の海で、この湾の中のみで生息している。

1970年度の総漁獲量を構成する best ten の漁獲漁種について、その和名、メキシコ名、英名及び学名については次のとおりである。

	和名	メキシコ名	英名	学名
1位	エビ類	Camaron	Shrimp	Penaeus setiferus P. aztecus P. duorarum P. stylirostris P. vanamei P. californiensis P. brevisrostris

	和 名	メキシコ名	英 名	学 名
2位	マイワシ	Sardina	Sardin	Sardinops caeruleus
3位	カキ	Ostion	Oyster	Crassostrea virginica
4位	マグロ類	Atun	Tuna	Thunnus species
5位	イシナギ	Mero	Giant seabass	Epinephelus species
	ハタ類	Cabrilla	Grouper	Mycteroperca species
6位	サバ	Macarela	Mackerel	Scomber species
7位	タイ類	Huachiuéugs	Snapper	Lutyanus species
		Pargo	Snapper	
8位	アンチョビー	Anchoveta	Anchovy	Engraulis mordax
9位	海ガメ	Tortuga	Turtle	Lepidochelys obivacea
10位	アワビ	Abulon	Abalone	Haliotis species

和 名	英 名	メキシコ名
ハタ類	Grouper	Cabrilla
	Seabass	Garropa
	Rock hind	Abadejo
		Cherna
		Baqueta
		Cabra mora
ニハチ類	Drum	Caballo
	Croaker	Berugata
	Green. jack	Corbina
	Southern kingfish	Verrugato
	Orange mouth	Gallina
	Atlantic croaker	Alacran
		Corvinza
		Boquinate
		Rouco
		Zorra

和名	英名	メキシコ名
		Croca Gurrubata Saliwazo Polla Churra Roncachos Codorniz Tambor Roncadore Tonoaba Torton Trucha de mar
フエダイ類	Snapper Snapper	Hunchinaugo Pargo Rubia Pajarillo Biajaiba Guacba Canane Tiguagua Kauxik Cubera Villajaiba
スズキ類	Seabass Snook Grouper Sand. bass Soap fish White bass	Cabrilla Robina flanca Baya Garlops Carajo Jabonero

和名	英名	メキシコ名
ア ジ 類	Tarpon snook	Rabirrubia
		Serrano
		Bobalo
		Guasa
		Ojon
		Guaseta
		Chucumite
		Cabalicucho
		Jurel
	Jack	Robalo
	Leatherjacket	Orquete
	Bumper	Pampano de herba
	Look down	Cojinua
	Moonfish	Jorobado
	Scad	Machin
	Mexican scad	Ojoton
	Bigeye scad	Peleon
	Powpano	Quiebra
	Rooster fish	Viejo
Pacific moonfish	Pezluna	
	Banderilla	
	Monda	
	Peces gallo	
	Cacana	
	Gallo	
	Casabe	
	Lejabin	
	Chapete	
	Corcovado	

和名	英名	メキシコ名
メジロザメ	Requiew shark	Bironche
	Black tip shark	Cazou jaquetou
		Gambuso
	Lemon shark	Tibulon awarillo
	White shark	Tibulon blauco
	Requiem shark	Tibulon cauguay
	Blacktip shark	Tibulon volador
	Lemon shark	Tibulon cazon
	Bull shark	Tibulon chato
	Requiem shark	Tibulon puntiblanco
ネコザメ	Horn shark	Cabeza de toro
	Horn shark	Tibulon coruuda
ハナザメ	Fintooth shark	Cazon
ホシザメ	Requiem shark	Tibulon gato
	Gray smooth hound	Tibulon mawon
	Atlantic shortnose shark	Cazon
ヒラガシラ	Pacific sharpnose shark	Tibulon tello
	Greathammerhead	Cornuda
シユモクザメ	Smooth hammerhead	Pez martillo
	Leopard shark	Leopardo
ドナザメ		Tibulon rayado
	Bonito shark	Paloma
アオザメ	Mako	Tibulon marrajo
	Guitarfish	Peces guitarra
サカタザメ	Pacific angel shark	Pez diable
カスザメ		
ギンザメ	Chimaera	Pez raton
ノコギリザメ	Small tooth sawfish	Pez sierra
ジンベイザメ	Whale shark	Tibulon ballena
イタチザメ	Tiger shark	Tibulon tigre

和 名	英 名	メ キ シ コ 名
イ タ チ ザ メ		Tintorera
オ ナ ガ ザ メ	Thresher shark	Tibulon coludo
テ ン ジ ク ザ メ	Nurse shark	Tibulon gata
ネ ズ ミ ザ メ	Salmon shark	Tibulon salmon
ヨ シ キ リ	Blue shark	Tintorera
エ イ	Reyand skate	Raya
ア カ エ イ	Atlantic sting ray	Raya de espina
シ ビ レ エ イ	Electric ray	Raya electrica
ツ バ ク ロ エ イ	Butterfly ray	Raya mariposa
マ ダ ラ ト ビ エ イ	Spotted eagle ray	Raya pinta
ヒ ラ タ エ イ	Sting ray	Tibulon raya
タ ナ ウ オ	Cutlass fish	Liston
		Machete
		Salvora
		Cintilla
ソ ウ ダ カ ツ オ	Frigate mackerel	Macarela
ヒ ラ ソ ウ ダ	Frigate mackerel	Macarela bonito
カ ツ オ	Skipjack tuna	Barrilete
ハ ガ ツ オ	Pacific bonito	Bonito de california
キ ッ ネ ガ ツ オ	Striped bonito	Bonito de Mexicana
サ ワ ラ	Spanish mackerel	Macarela
		Serrucho
		Sierra
	King mackerel	Caballo
シ イ ラ	Dolphin	Dorado
		Doradilla
ウ ル メ イ ワ シ	Round herring	Arenque japonese
ト ビ ウ オ	Flying fish	Pez volador
ク ロ マ グ ロ	Bluefin tuna	Atun aleta azula

和 名	英 名	メキシコ名
キハダマグロ	Yellowfin tuna	Atun aleta amarilla
ビンチヨウマグロ	Albacore	Albacora de pacifico
クロカジキ	Blue marlin	Marlin
メカジキ	Sword fish	Pez vela
バジヨウカジキ	Sail fish	Pez vela
サギ	Mojara	Mojarra
ボラ	Mullet	Bobo
	White mullet	Lebraucha
	Mullet	Lisa
	Mountain mullet	Trucha de tierra
カマス	Barracuda	Barracuda caliente
		Tolete
		Buzo
サバヒ	Milk fish	Rabisuchi
アフリ	Greater amber jack	Coronado
	Scad	Dorado
	Scad	Jurel
コバンアジ	Bonito shark	Paloma
	Pompano	Palometa
	Pompano	Pampano
メアジ	Pompano	Chicharro
ムロアジ	Mexican scad	Jurel fino
ニジマス	Rainbow trout	Trucha arco iris
ヒラメカレイ類	Flounder	Huarache
		Lenguado
ヒラアジ		Papelillo
イルカ	Dolphin	Toninas
スミイカ	Ink fish	Calamar
タコ	Octopus	Pulpo

和名	英名	メキシコ名
タコ		Callo de hacha
カニ	Crab	Cangrejo
イセエビ	Lobster	Langosta
カエル	Frog	Rana
カラスミ		Huevo de lisa
貝類	Shell	Concha
イガイ		Alweja
ヒトデ	Starfish	Estrella
サンゴ	Coral	Corales
デングサ	Kelp	Algas

3. 地域別水産業の実態

メキシコ合衆国の漁業水域は水産行政的に4水域に区分され、各水域で生産される漁獲量は以下の様な百分率である。

- 太平洋側水域……62%
- 北部水域………56%
- 南部水域………6%
- メキシコ湾側水域…38%
- 北部水域………22%
- 南東部水域………16%

各水域に海岸線をもつ州別の、海岸線の長さ、大陸棚の面積、代表的な主要漁港又は重要な漁業基地、及び、その港湾施設上の優劣度については、概ね、次のとおりである。

1. 太平洋側北部水域

- Baja california 北部 …… エンセナダ(秀)
- Baja california 南部 …… ラバス(秀)
- 海岸線 …… 3,000(杆)(南北合計)
- 大陸棚面積…… 18,000(平方杆)
- Sonora 州 …… ガイマス(秀)

	海岸線	920 (秆)
	大陸棚面積	9,000 (平方秆)
Sinaloa 州		マサトラン (秀) トロボムボ (良)
	海岸線	650 (秆)
	大陸棚面積	6,000 (平方秆)
Nayarit 州		サンブラス (可)
	海岸線	240 (秆)
	大陸棚面積	2,000 (平方秆)

2. 太平洋側南部水域

Jalisco 州		ブエルト・バヤルータ (良)
	海岸線	250 (秆)
	大陸棚面積	4,000 (平方秆)
Colima 州		マンサニヨ (優)
	海岸線	110 (秆)
	大陸棚面積	1,500 (平方秆)
Michoacan 州		ベタカルコ (可)
	海岸線	210 (秆)
	大陸棚面積	2,500 (平方秆)
Guerrero 州		アカブルコ (秀)
		シワタネホ (良)
	海岸線	370 (秆)
	大陸棚面積	5,500 (平方秆)
Oaxaca 州		サリナクルス (秀)
	海岸線	510 (秆)
	大陸棚面積	41,000 (平方秆)
Chiapas 州		マデロ (可)
	海岸線	280 (秆)
	大陸棚面積	67,000 (平方秆)

3. メキシコ湾側北部水域

Tamaulipas 州		タムピコ (優)
--------------	--	----------

	海岸線	4 5 0 (秆)
	大陸棚面積	2 8, 0 0 0 (平方秆)
Veracruz 州	ベラクルス (秀)	
		アルバラード (秀)	
	海岸線	6 7 0 (秆)
	大陸棚面積	2 1, 0 0 0 (平方秆)

4. メキシコ湾側南東部水域

Tabasco 州	フロンテラ (可)	
	海岸線	1 9 0 (秆)
	大陸棚面積	4, 0 0 0 (平方秆)
Cawpeche 州	カムペチエ (秀)	
		シウダ・デ・カルメン (秀)	
	海岸線	3 9 0 (秆)
	大陸棚面積	6 0, 0 0 0 (平方秆)
Yucatan 州	プログレン (優)	
		ユカルベテン (優)	
	海岸線	4 4 0 (秆)
	大陸棚面積	9 0, 0 0 0 (平方秆)
Quintanaroo 州	チエツマル (良) 兵	
		コスメル島 (良)	
		ムヘレス島 (良)	
	海岸線	8 6 0 (秆)
	大陸棚面積	2 1, 0 0 0 (平方秆)

各水域における重要魚種は次のとおりである。

1. 太平洋側北部水域

回遊性資源	イワシ	マグロ	アンチヨビー	カツオ	サバ
底魚資源	イシナキ	ハタ類	エビ類	トトアバ	タイ類
磯資源	アワビ	イセエビ			

2. 太平洋側南部水域

回遊性資源	海ガメ
-------	-----

底魚資源 エビ類

3. メキシコ湾側北部水域

回游性資源 サワラ サバ

底魚資源 タイ類

磯資源 カキ

4. メキシコ湾側南東部水域

底魚資源 エビ類, イシナギ, ハタ類, タイ類

磯資源 イセエビ, カキ

各州別の重要魚種の漁獲状況は次のとおりである。

1. 太平洋側北部水域

Baja California 北部

回游性資源 イワシ, マグロ, アンナヨビー, カツオ, サバ

底魚資源 トトアバ

Baja California 南部

底魚資源 イシナギ, ハタ類

磯資源 アワビ, イセエビ

Sonora 州

回游性資源 イワシ

底魚資源 エビ類, トトアバ

Sinaloa 州

底魚資源 エビ類, タイ類, ハタ類

Nayarit 州 未開発

2. 太平洋南部水域

Jalisco 州

回游性資源 海ガメ

Colima 州 未開発

Michoacan 州 未開発

Guerrero 州

回游性資源 海ガメ

Oaxaca 州

- 回游性資源 海ガメ
底魚資源 エビ類
- Chiapas 州
底魚資源 エビ類
3. メキシコ湾側北部水域
Tawaulipas 州
底魚資源 タイ類
- Veracruz 州
回游性資源 サワラ、サバ
底魚資源 タイ類
磯資源 カキ
4. メキシコ湾側南東部水域
Tabasco 州
磯資源 カキ
- Campeche 州
底魚資源 エビ類、タイ類
- Yucatan 州
底魚資源 イシナギ、ハタ類
磯資源 イセエビ
- Quintanaroo 州 未開発

総漁獲量の推移

(単位万トン)

1953	58	59	60	61	62	63	64	65	68	69	70
11.2	16.1	17.3	20.6	19.1	17.3	19.9	19.8	20.0	24.0	23.3	25.6

最新の統計は1970年度のものであるが、この年の総漁獲量は255,900トンで、過去10ヶ年間に約5万トンの増加をみているが、年平均の生長率は2.2%に過ぎない。

メキシコ合衆国の水産統計数値は、国内業者による生産量と、政府の許可をうけた外国人(主にアメリカ人)による生産量との合計である。その割合は、1960年の31%をピークとし、外資業者による生産は下降の一路を辿り、今や5%以下に衰えている。このことは、メキ

シコ漁業に対する外国人の魅力が減少或は漁獲率の低下を物語るものといえよう。次第に国内業者による生産を膨脹させていくためには、何と云っても、もっと沢山の魚を食べるように当局の助長奨励がしきりに望まれている。

総漁獲量255,900トンの構成は、食用魚の生産量が202,700トン(79%)で、工業用原材料或は製品となるものが、53,200トン(21%)であった。食用魚202,700トンの中で上位の四品種即ち、エビ類、マイワシ、カキ、マグロ類の合計のみで121,623トンを占め、それは60%に相当する。これ等の四種は、主に外国へ輸出され外貨獲得の上で重要な役割を果たしている。

工業用53,200トンの構成は、海藻の29,187トン、魚粉の19,500トンその他の4,513トンである。

1970年度の総漁獲量の中で、上位10位を占める所謂 best ten は、殆んど外貨獲得用の輸出水産物として利用されていることは、注目に値する。

筆頭	エビ類	冷凍として
2位	マイワシ	缶詰として
3〃	カキ	缶詰として
4〃	マグロ	缶詰として
5〃	イシナギ、ハタ類	フィーレとして
6〃	サバ	缶詰として
7〃	タイ類	フィーレとして
8〃	アンチヨビー	缶詰として
9〃	海ガメ	
10〃	アワビ	缶詰として

以上の諸統計を取纏めてみると、概ね次の様な概念が出来あがる。

1. マグロ類生産の凋落が顕著である。このことは、マグロ類資源量の減少にも拘わらず、資本家の投資が縮小されたためである。
2. マイワシ、アンチヨビー、サバなどの回遊性魚類の上位進出が目立つ。このことは、操業区域が沿岸から沖合へ拡大されたことにもよるが、寧ろ、マグロ類資源の代りにこれ等の資源を漁獲努力の対象にする様になったためであろう。
3. イシナギ、ハタ類、タイ類、アワビ、イセエビなどの岩礁乃至磯資源の生産量は、それほど大きな変化をみせていない。それは、これ等を対象とする漁具漁法を依然、原始的を一本釣りに類

っているせいであろう。

4. 総漁獲量を地域別にみると、メキシコ全国の半分以上は、カリフォルニア半島の、太平洋側に面する北部水域で漁獲されており、その主要漁具漁法は、まき網である。それに続く太平洋側の南部水域は、全体の僅かに6%に過ぎない。その主要漁具漁法はトロールである。この太平洋側の漁獲状況に対し、メキシコ湾内における生産状況は、全国の約40%を占め、その主要漁具漁法は、トロールと原始的な一本釣である。

5. 漁具漁法の見地から、漁獲状況を考えてみると、メキシコ全水域で最も繁栄している漁業は次の三種類である。

- (1) エビ類のトロール漁業
- (2) マグロ類、イワシ類のまき網漁業
- (3) タイ類、イシナギ、ハタ類の一本釣漁業

6. 三種類の漁業を水域別にみると次のとおりである。

(1) エビ類のトロール漁業

- (A) メキシコ湾内のカムベチエバングを中心とする漁場水域
- (B) カリフォルニア湾内のBaja califoruia 州 南部の沿岸を除く全水域
- (C) 太平洋側南部のテファンテベック湾内の全水域
- (D) マサトランを中心とするSinaloa 州沿岸の大陸棚
- (E) Baja california 州南部の、太平洋側に面した大陸棚。

(2) マグロ類、イワシ類のまき網漁業

- (A) Baja california 州北部の太平洋側に面した、エンセナダを基地とする操業水域
- (B) ベラクルスを基地とするメキシコ湾内における操業水域

(3) タイ類、イシナギ、ハタ類の一本釣漁業

- (A) Tamaulipas 州のタムピコを基地とするメキシコ湾内の北部水域
- (B) ユカタン半島の周辺
- (C) Baja california 州南部の全水域
- (D) Sinaloa 州下の全水域

7. エビ類資源を対象とするトロール漁業の中で、太平洋側南部の、テファンテベック湾内で操業されている、サリナクルスを基地とする該漁業について、資源の豊凶が甚だしく、産業的に非常に伸び悩んでいるとのことである。私が、オアハカ州知事と懇談した折、知事からも特に

この点が強調され、エビ漁業一辺倒の現状から脱却する方法について、真剣な表情で、私の意見を求めておられた。

4. 漁業者数

漁業者数の年次別変化表

年次	組合員	%	漁業者	%	合計	(註)
1959	18,332	61.6	11,427	38.4	29,759	100
60	19,375	60.5	12,668	39.5	32,043	108
61	19,028	56.6	14,561	43.4	33,589	113
62	19,700	56.7	15,066	43.3	34,766	117
63	20,636	55.9	16,287	44.1	36,923	124
64	21,127	55.2	17,171	44.8	38,298	130
65	22,144	55.5	17,741	44.5	39,885	134
66	21,867	52.7	19,612	47.3	41,479	139

(註) 1959年度の指数を100とした時の年次別推移

この表をみて次の事実が発見される。

1. 協同組合員と漁業者との比率は、年々反比例し、漁業者数の増加に対し、組合員数は逆に減少している。
2. 全国漁業者の総数は毎年、年を追って増加の一路を辿り、1959年度を100とした時8年後の1966年度のそれは139と、伸びている。

1966年度における地域別漁業者数

総漁獲量 百分率	地域別	組合員	%	漁業者	%	合計	%
56%	太平洋北部	12,075	74.9	4,040	25.1	16,115	39
6%	太平洋南部	3,885	44.3	4,891	55.7	8,776	21
22%	メキシコ湾北部	3,209	32.5	6,680	67.5	9,889	24
16%	メキシコ湾南東部	2,698	62.8	4,001	37.2	6,699	16

この表をみて次の事実が発見される。

1. 太平洋北部が全体の39%を占め、全国の総漁獲量に占める割合も最高の56%を占めている。このことは、この水域が、メキシコ合衆国の水産業の生産の中心地域であることを示している。
2. この水域に次いでさかんなところは、メキシコ湾北部水域である。
3. 太平洋の南部水域は、21%の漁業者数を占めているにも拘わらず、全国の総漁獲量に占める割合が、最低の5%であることは、資源の開発がおくれていることは勿論、一番頼りにしているエビ類の資源が次第に減少しているためである。
4. メキシコ湾南東部の水域は、全国の漁業者数に占める割合が最低であるにも拘わらず、全国の総漁獲量に占める割合が比較的に大きいことは、この水域における漁業の生産性が極めて高いことを示唆するものであろう。

5. 漁 船 数

メキシコ合衆国の漁船の隻数は、1965年現在で、11,521隻である。その年次別漁船隻数の推移については次のとおりである。

年次別漁船隻数の推移

年次	3トン以下	4~10	11~50	51~99	100トン以上	合計隻数	(註)
1959	6,990	438	992	276	26	8,722	100
60	6,721	336	998	276	13	8,344	95
61	7,725	405	899	249	11	9,289	106
62	8,275	389	974	263	16	9,917	114
63	8,273	400	1,112	335	12	10,132	116
64	8,823	471	1,199	351	14	10,858	124
65	9,526	403	1,220	357	15	11,521	132

(註) 1959年度の指数を100とした時の年次別推移

1960, 1965両年度におけるトン数別隻数の増減比率

	1960	1965
3トン以下	80.5	82.7
4~10	4.0	3.5
11~50	11.9	10.6
51~99	3.3	3.1
100以上	0.3	0.1

この表から、毎年、年を追って、3トン以下の漁船の隻数が増加しているのに対し、他のランク内の隻数が逆に減少していることを発見出来る。

合計隻数は、6ヶ年間に、約3割強の増加を示した。

1965年度における全国漁船隻数のトン数別地域別分布状況

	太平洋北部	太平洋南部	メキシコ湾北部	メキシコ湾南東部
3トン以下	2,997	1,649	3,797	1,083
4~10	77	27	159	140
11~50	582	123	83	432
51~99	223	19	15	100
100以上	14	1	0	0
合計隻数	3,893	1,819	4,054	1,755

この表をみて次の事実が発見される。

1. 3トン以下の漁船の分布が全国的であることは、メキシコ合衆国の水産業が未だ非常に低次の段階を放浪しており、原始的な漁船で操業する姿が全国的に見られる、ということの意味する。
2. 3トン以下の漁船に次いで、11~50トン級の漁船が多いことが発見される。このことは、この大きさの漁船の殆んどが従事しているトロール漁業の操業が、太平洋北部及びメキシコ湾の南東部でさかんであることを意味する。
3. 50トン以上の漁船が太平洋北部及びメキシコ湾の南東部に多いことは、大型の漁船がトロールに使用されていることを意味する。
4. 100トン以上の漁船が、太平洋北部水域に多いのは、この様を大型船が主に従事している

まき網の操業がさかんに行なわれていることを意味する。

5. 分布は、太平洋北部とメキシコ湾北部の両水域に多く、太平洋南部とメキシコ湾南東部の両水域に少ないことは、前掲の漁業者数の統計でもあきらかであるように、メキシコ合衆国の水産業の発達に、北部に早く南部に遅いことを意味する。但し、メキシコ湾の南東部は、カムベチエ、ジクタを中心漁場とする極地的な異常発達がそこにあることを見逃すことは出来ない。
6. 合衆国の北部が、南部よりはすすんでいるという印象をうけるが、同じ北部でも、太平洋側の北部水域が比較的大型漁船が多く分布しているのに対し、メキシコ湾側の北部水域が比較的に、寧ろ3トン未満の原始的な漁船が圧倒的に多いことは、前者が稍々原始的業態を脱しつつあるのに対し、依然後者は未だ零細性の域を脱し切れずにいることを意味している。

6. 太平洋側の漁業

太平洋の東側は、いうまでもなく、北からアラスカ、カナダ、アメリカ、メキシコ、グアテマラ、エルサパドル、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、コロンビア、エクアドル、ペルー、チリと続いているが、メキシコ合衆国の水産業に関する限り、カリフォルニア海流（寒流）と北赤道海流（暖流）が合流する水域が、メキシコの領域内であるということは、海洋漁場的に、良好な漁場をメキシコ合衆国に与えているのではないかと想像される。ところが、誠に皮肉なことに、両海流が合流する水域、いわば良好な漁場水域であると思われる、そのどまん中に、政府の言葉で表現すると、「何人と雖も近接することを禁ずる」、ところの、マリヤス諸島が点在しているのである。その理由は、この諸島の中の一つに、日本でいえば北海道の網走刑務所の様な長期受刑者達の刑務所が所在していることで、魚の側からいえば、地球上にこれ以上の天国はないということになる。その「何人と雖も」と表現している内容は決して単なる修飾語ではなかった。メキシコの政党の一つ、立憲革命党（PRI）は、日本の自民党のように、現在、最も実力を持っている長期政党で、1929年の党創設以来今日までの43年間、引続いて7名の大統領を送って長期政権を確保している。従ってこの政党の総裁といえば、その権力のほどが知れようというものである。私は前総裁と組んで、彼の選挙区であるミナオアカン州の水産資源の増産に関する計画をすすめた。刑務所のあるマリヤス諸島は、この州から至近の距離にあるから、この世の春を謳歌するPRIの前総裁なら、如何に、「何人も近接すること」の出来ないマリヤス諸島と雖ども、近接して操業することは可能であらうと甘く考え、その計画を総裁に提出し、総裁も甘く考えていたらしく簡単にOKしてくれた。然し、間もなく、総裁は顔を曇らせ、私にその

不可能であることを告げて来た。

カリフォルニア海流は、オットセイやアザラシの様な寒流の中にすむ海獣類を、亜熱帯圏内にあるメキシコ合衆国内に分布させている。サンフランシスコの観光バスは、彼等がすんでいる島のみえる小高い丘の上に観光客を案内しているが、シスコから更に約2千軒南下したカリフォルニア半島の南端にある、ラパスというところは、緯度の上では北回帰線上にある熱帯であるが、ラパス湾口にある島の上で、私はしばしば彼等が遊んでいる姿を目撃している。このような天与の豊富な資源が、今日まで、みがかれざるダイヤモンドのように、勿体なくも放置されたまゝであるということは誠に惜しみても余りある事実で、メキシコ合衆国水産業の有望な将来性を如実に物語るものであろう。

太平洋の東部海岸線は、北はアラスカから南は、アルゼンチンに至る南北120°に亘る非常に長い海岸線であるが、メキシコは大体その中間の北緯14°33'より32°43'の間に存在し、回游性魚類資源の豊富な漁場に恵まれている。然るに、今日まで、回游性魚類を対象とする沖合、遠洋漁業に関する限り、アメリカとの国境に近いエンセナダ港を基地とするまき網漁業が小規模に行なわれているのみで、寧ろ、これからといった感が深い。

この様な、回游性資源を対象とする増産計画は、その資源の恩恵に浴するすべての国の、共同作業のもとですすめられていくことが、今日の常識になっているが、その様な性格をおびた業務は、当然、国連のような国際機関の仕事であらう。それ故に、既に、国連FAOは3千万ペソの資金を投与し、pelagic, bottom boat, shrimp echo-sounder, skipper などに関する一群の専門家をもメキシコ合衆国へ派遣し、活発な業務を展開している。この業務は決してメキシコだけの資源を対象としているものではなく、メキシコ、中米の5ヶ国、そして南米のエクアドルまでを対象とする広範囲に亘るプロジェクトである。その大本営はメキシコ市内に所在し、使用される研究船フンボルト号の前進基地はマサトラン港に置かれている。これ等の諸国の中でメキシコは、世界の五大漁場の一つ、太平洋東部中央海域を沖合に持ち、同じく世界五大漁場の一つ、太平洋北西部海域を持つアラスカ、北米に次ぐ、豊かで広大な大陸棚に恵まれている。大陸棚がメキシコの太平洋側に与えている面積は、太平洋に面している各州の北から南へそれぞれ次のとおりである。

Baja california 州	18,000 平方軒
Sonora 州	9,000 〃
Sinaloa 州	6,000 〃
Nayarit 州	2,000 〃

Jalisco 州	4,000 平方杆
Colima 州	1,500 //
Michoacan 州	2,500 //
Guerrero 州	5,500 //
Oaxaca 州	41,000 //
Chiapas 州	67,000 //
合 計	156,500 平方杆

メキシコの太平洋岸は、屈折に富むカリフォルニア半島を除けば、概ね単調で、カリフォルニア半島は、緯度 32° と 22° との間に跨る約 1,000 杆に及ぶ、南北に細長く突出した半島で、半島とメキシコと本土との間に囲まれた細長い浅海性のカリフォルニア湾は屈折に富む海岸が多く、港内には大小無数の島嶼が散在し、湖沼と入江の数も非常に多い。この湾内には世界の海でここだけにしかすんでいない、トトアバ (*Gynoscion Macdonald*) という魚がいる。これは殆んど米國へトラックで輸出され、そのトラックの通過する公道を特にトトアバ、ルートと呼称している。カリフォルニア湾がいかにか長大なものであるかという好例は、この湾を突き抜けるのに要する時間が、時速 850 杆のジェット機でさえ、1 時間半もかかった、ということである。その広さは、北海道と九州がすっぽり入ってしまう広大なものである。この湾が実に水産資源に富むのだから垂涎のものであろう。従って未開発の漁場が頗る多い今日でさえ、漁港として栄えている港が、カイマス、トポロバムボ、マサトランと、優秀な漁港が 3 港もある。トポロバムボといえは、水産大学の練習船がこの沖で巨大なイカを捕獲し、世界記録をつくっている。カリフォルニア半島の南端は、メキシコ観光地の中でも屈指に入るサンカス岬で、岬の東方約 5 里位のところにある岩礁上に、日本の遠洋まぐろ漁船いなり丸が座礁している。この岬から南南西約 250 里のあたりに散在するレピヤヒヘイド諸島と、この岬を結ぶ線を直径とする円周内こそは、日本の遠洋マグロ漁船がその豊漁を楽しみにしているところで、日本の漁師達がメキシコの漁場といっているところは、このあたりをさしているのである。

太平洋側では、このほかに、エクアドル沖の良好なまぐろ漁船が有名である。所謂世界五大漁場の一つ、太平洋東部中央海域がそれである。レピヤヒヘイド諸島よりはずっと、メキシコ本土寄り、ナヤリット州のサンブラス港より距岸 60 里位のところに、囚人島で有名なマリアス諸島がある。カリフォルニア海流と北赤道海流の寒暖両流が合流しているところ、海洋漁場学的に良好な漁場を形成していると思料される水域のどまん中に、この諸島が横たわっている。いかえると、法律をもって「何人と雖も近寄ることの出来ない」水域こそ、メキシコで最も良好な漁場で

ある、というわけである。更に南下し、アメリカ人のための sport fishing で有名なブエルト、バヤルータ及びアカブルコを通過すると、メキシコ湾の、カムベテエ、バンクに次いで広い大陸棚に出会う。これが、オアハカ州とチアパス州の両州に跨がるトロール漁場である。その生産活動の中心地は設備のよい造船所で有名なサリナクルスである。約11万平方軒を持つ、その大陸棚の広さは、メキシコ湾内の有名なエビ漁場であるカムベテエ、バンク周辺の大大陸棚、15万平方軒には及ばないとしても、まだまだ開発の余地が少なからず残されていることには間違いない。

要するに、メキシコ太平洋側の、水産資源の存在は、漁獲量からみて、回游性魚類資源としての、マグロ、マイワシ、アンタヨビー、カツオ、サバ、アジ、ブリなどで、最新の1970年度の統計では、第2位のマイワシ、第4位のマグロ、第6位のサバ、第8位のアンタヨビーと、ベストテン内に4種類の回游性魚類が顔を出している。アンタヨビーは、缶詰工場の原料として最適であるが、工場を運営するためには、少なくとも4万トンの供給がConstantに可能でなければならぬ。1970年の統計によれば、未だ僅かに5千トン強の漁獲量に過ぎない。

最近までは、マグロがメキシコを代表する筆頭魚類であったが、その王座は、今日ではエビに奪われてしまった。過去18年間の統計によれば、マグロは5万トンからスタートし、18年後の1970年には1.1万トンと下降線を辿って来たのに対し、エビは、2万トンからスタートし同じく1970年には、4.3万トンと、着実に上昇線を辿って来ていたことがわかる。マグロの減産はメキシコだけの現象ではなく、世界的な傾向であるが、まき網一辺倒のメキシコのマグロ生産方法にも問題がないとはいえないだろう。回游性資源の生産力については今のところ何ともいえないが、底魚資源の場合は、勿論、エビを筆頭に、太平洋側の資源の生産力はまだ上昇期の段階にあるとみて差支えない。

最新の、1970年度の統計によれば、ベストテンの中の、カキを除く9種類は全部、太平洋側の水域から生産されている。特に、マイワシ(2位)、マグロ(4位)、アンタヨビー(8位)海ガメ(9位)、アワビ(10位)は、太平洋側の特産で、特に、海ガメを除く他のすべての魚種は、カリフォルニア半島の周辺で産する。太平洋側の底魚資源の筆頭は勿論エビで、イシナギ、ハタ類、イセエビ、タイ類などが比較的の多量に漁獲されている。

イシナギ、ハタ類及びタイ類は、アワビ、イセエビなどとともに所謂磯資源で、その漁獲は原始的な生産手段である一本釣漁法によるものであり、アワビ、イセエビは潜水によるものであるから、これ等の爆発的な増産は到底望むべくもないが、エビは爆発的とまではいえないにしても着実に上昇線をたどり得る生産品であることは、異論の余地がないであろう。この外、太平洋側

は愚か、世界広しといえども、カリフォルニア湾内にしか生産しないトアバがいることは前述のとおりである。

ベストテンの中のカキ(3位)は、現在ベラクルス、タバスコの両州で特産されているが、殆んど天然産のものである。1969年から太平洋側のSinaloa州下で、O.T.C.Aから派遣されたカキ養殖の主藤専門家が、日本からタネカキを空輸し、メキシコの海の中で美事に大きく育てあげる試験に成功している。

7. 太平洋側の漁港

太平洋に面する漁港は、現在、北から、エンセナダ、ラバス、マタンシタ、ベナスコ、グアイマス、トポロバムボ、グアイマス、サンブラス、バイルータ、マンサニヨ、ベタカルコ、シワタネホ、アカブルコ、サリナクルス、マデロ、の15港で、最も施設のよい漁港から書くと、エンセナダ、サリナクルス、マサトラン、アカブルコ、グアイマス、トポロバムボ、マンサニヨ、ラバス、シワタネホ、マタンシタ、バイルータ、ベナスコ、サンブラス、ベタカルコ、マデロ、の順で、エンセナダ、サリナクルス、マサトラン、アカブルコ、グアイマス、トポロバムボ、マンサニヨ、ラバス、シワタネホ、の港湾施設は良好である。然し、漁港施設となると、最良の部に属する港は、エンセナダ、サリナクルス、マサトラン、グアイマスの四港で、やや落ちる港が、アカブルコ、トポロバムボの二港で、マンサニヨ、ラバス、シワタネホ、マタンシタの四港は、施設が未だ完備されていない。バイルータ、ベナスコ、サンブラス、ベタカルコ、マデロの、五港は、まだ原始的な港の域を脱していない。最上位に属する四港は、太平洋の漁業を代表する、マグロ類、イワシ類のまき網及びエビ類の、トロール漁業の基地である。

エンセナダ港	}	まき網漁業
グアイマス港		
マサトラン港	}	トロール漁業
サリナクルス港		

アカブルコ港は、メキシコ湾内のベラクルス港の様に、漁港であるというよりは、商港であり、軍港である。また、世界的に有名な観光地として、生産の港であるというよりは、むしろ消費の港であると考えた方が正当であろう。

マタンシタ港は、メキシコの水産業の発達振興のために特に熱心であった、ロベス、マテオス大統領の遺産の一つで、この港の別名をロベス、マテオス港と、知っているほどである。

この港が建設され、漁港施設が出来あがったために、地元の漁業は、飛躍的な発展を遂げ、漁獲量は10倍以上に達した。メキシコといえども、漁港施設が設備されたならばこのように生産量が増大する、という好例の一つである。

8. メキシコ湾の漁業

メキシコ湾は、北米大陸の南部、フロリダ半島、キューバ島、ユカタン半島に囲まれた大きな海湾で、その総面積は、日本領土の二倍近くある。最も深いところは、4,023米もある。大陸棚が、メキシコに与えている面積は、20万3千平方呎で、メキシコ湾に面している各州の、北からそれぞれ、次のとおりである。

タマウリパス州	28,000平方呎
ベラクルス州	21,000 //
タバスコ州	4,000 //
カムペチエ州	60,000 //
ユカタン州	90,000 //
合 計	203,000平方呎

メキシコ湾に潜在する水産資源は極めて豊富で、約20万平方呎の大陸棚は、メキシコに、天与のエビ類、タイ類、イシナギ、ハタ類などの高級な底魚資源を授け、マグロ、サワラ、サバナなどの回遊魚も、その開発が待たれている。メキシコ湾が世界的に有名なことは、その海流が主に北米、英国及び北欧の気候を左右していることで、この暖流が若し無かったならば、これ等の地域における今日の繁栄は勿論あり得なかったに相違ない。メキシコ湾から発するこの暖流は、フロリダ海峡を経て大西洋に入り、アメリカの東部海岸にそって北上し、北緯50°附近より北大西洋海流と変名し、英国及びアイスランドを洗って、更に北上を続け、遂には、スカンジナビア半島の西岸を洗いつつ、北極海に消え去る。

メキシコ湾流は、またユカタン海峡を経て、カリブ海に入り、南米の北岸を東方へ南下している。メキシコ湾流は日本の黒潮とともに、世界の二大暖流と称せられ、最大の流速は、1日約100呎、水温は最高で約28℃、ニューファンドランド島沖で、ラブラドル寒流と衝突し、そこに所謂世界の五大漁場の一つ、大西洋西北部漁場を人類に与えており、アメリカとカナダがその天与の恩恵に浴している。メキシコ湾といえは、イの一番にエビの漁業が頭に浮んでくる。太

平洋及びカリブ海などを、エビ漁業の先鞭をつけた日本人は、メキシコ湾内においても、タイ類の日本釣漁業に成功している。タムピコで、「タイの中島」といえば、知らない人はいない。

メキシコ湾に続くカリブ海に、その岸辺を洗われているキンタナロー州は、メキシコの中にある二つの最も未開発の州の一つで、その理由は、資源が乏しいからではなく、文字どおり、磨かれざるダイヤモンドがいたるところにころがっているにも拘わらず、放置されたまゝであるからである。440軒の海岸線は、比較的屈折が多く、内湾入江に富み、カリブ海海賊として有名な、モルガン、ドレイク、黒ヒゲ、キッド、ホーキンス達が、自分の女を島に置いて稼ぎ荒した、その名も「妻の島」そしてコスメル島と、観光及び水産業にとっては、極めてホープな州である。それにも拘わらず、磨かれざるダイヤモンドがそのまま放置されていた最大の理由は、水産業の発達振興にとって必須条件の一つである流通機構という点にある。例えば、満足な道路網がない。これでは折角生産しても、消費地へ輸送することが出来ない。漁民はこういつている。「売れないからとらない、然し魚はたくさんいる」、と。

ユカタン半島とキューバ島との間は、約60里のユカタン海峡で、メキシコ湾とカリブ海を地理的に区別している海峡であるが、この海峡を通過するマグロ類の大群を生産の対象とすることは賢明な策である。

ユカタン半島の東部、即ち、ホンジュラス湾の一部を形成し、カリブ海の磯波に洗われているキンタナロー州の海岸は、地球が生れたまゝの姿で残されている。白くキラキラ輝やく砂浜があるか、また誰も入ったことのないマングローブのジャングルがあるか、そのいずれかで、動くものといえば、ワニか、海ガメか、或は海鳥か、ときどき水面上を跳びはねる楽しそうな魚ぐらいのものであろう。

大陸棚は狭く、ところどころに岩礁が横たわり、海底は粗雑な様相を呈している。少し深いところには、魚礁が多く、恐らく、全メキシコ領海内で最も魚礁に富む水域であろう。従って、キンタナロー州は、豊富な底魚、磯資源に恵まれているので、その開発はこれからが楽しみであろう。但し、その前に道路網の完成の方が先である。

現行メキシコ湾内の漁業を代表している漁具漁法は、次のとおりである。

1. カルメン、カムベチエのエビ類のオッタートロール
2. タムピコ及びユカタン州下の、タイ類、イシナギ、ハタ類の一本釣
3. ベラクルスの、サワラ落網

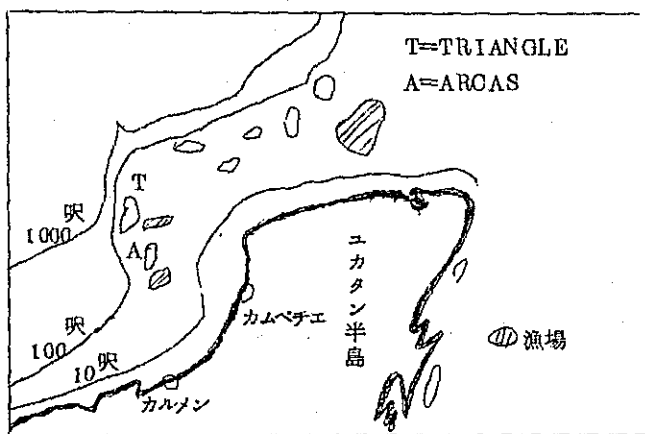
この外に、磯資源としての、イセエビ、カムベチエ、バンクのタコ、湾内全水域で生産されるボラとカキ、ベラクルスのイワシとマグロ、などの開発が期待の出来る今後の漁業であろう。

1. キンタナロー州下の未開発水域におけるイセエビなどの磯資源の開発は有望である。
2. 1967年、約6,000トンの輸出向けタコの生産計画が発表されたが、実際には、これだけの漁獲は出来なかった。然し、タコに対する急激な需要は、タコの生産を面的に刺激した。
3. ボラの卵、カラスミの需要が増大すれば、ボラに対する能率的な漁具漁法が要求される。東京のデパートで2,000円もする分厚い大きなカラスミが、メキシコの中央市場で僅か400円位で売っている現状から推量して、勿論、味の点について、品質そのものに問題があるかも知れないが、技術的な指導を与え、よい製品を上手に日本へ輸送して、変色、変味を防ぐことに成功した暁、メキシコのボラ漁業の将来性はあかるいものとなる。 (1970年11月調査、メキシコ市内中央市場において一枚のカラスミ(巾8cm、長20cm、厚1.5cm)=300円)
4. カキに関する限り、養殖に着手するのではなければ、その増産を期待することは不可能であろう。当局は、所謂、「地蒔き方式」で養殖の実験をすすめているが、O.T.G.Aから派遣されたカキ専門家は、垂下式の方法を実験して成功に導いた。但し、タネガキは日本から輸送されたもので、将来、このタネガキについて、メキシコ国内のものが使用され得ることになれば、大成功であろう。然し、タネガキが輸入されたとしても、日本の派遣専門家が実験でしめたように、大きな、重い、そして美味なカキにつくりあげることになれば、非常に利益のある仕事である、と断言してよい。何れにせよ、今後の絶えざる実験と研究のみが、カキ漁業の将来性を保証するに相違ない。
5. ベラクルスの沖合、水深20尋附近に、イワシの大群が去来していることを現地の漁業者は目撃している。地曳網の中にも、多量のイワシ類が混入される。
6. 1953年、アメリカのオレゴン号は、湾内に大量のキハダマグロが回遊している事実を公表して以来、マグロ漁業に関するメキシコ人の関心は、俄かにたかまった。ベラクルスでエビのトロールに従事していた泉重光氏は、日本式の延縄漁法で、この漁業に先鞭をつけて成功をおさめ、「ベラクルスのマグロのイズミ」は世界中に知れわたった。
7. ベラクルスの落網は、日本の漁網会社が落網を設計、敷設し、O.T.G.Aから派遣された落網の専門家が、漁労長として、その生産の責任に当たった。この落網の主要漁獲物はサワラである。メキシコ湾のサワラ漁業は非常に有望な漁業であるが、落網が使用される以前は、専ら地曳網による漁獲が行なわれているに過ぎなかった。然し、サワラの大群の魚道は、常に地曳網の届く範囲外で、地曳網で捕獲されるサワラは、大群の中のほんの一部分に過ぎなかった。この魚道の一部に、1970年、日本式の落網が定置された。この落網の漁獲成績は極めて良好で、当局は、この落網の定置数を更に増加させようと企画中である。

8. メキシコ湾を代表する、タイ類、イナギ、ハタ類の漁業は、一本釣、籠漁、トロールなどによるものであるが、もし、最も能率のよいトロールが成功すれば、増産を期待することが出来る。この、タイ類、ハタ類などのトロール試験操業が、1958年、アメリカ漁業局の所属試験船 silver bay 号によって実施された。試験操業が行なわれた漁場は、所謂、カムベチエ・バンクで、その試験操業の結果を要約すると、次のとおりである。

1. 最高の漁獲をしめした場所は、arcas バンクの東南方水深 20~35 尋のところ、33 回曳網し、4,600 ポンド(約 2,070 kgs)のタイ類と、700 ポンド(約 315 kgs)のハタ類が漁獲された。1 回網当り最高の漁獲をしめした時の漁獲は、タイ類の 870 ポンド(約 400 kgs) 及びハタ類の 50 ポンド(25 kgs)であった。
2. TRIANGLE バンクの東方海域で、1 回の曳網で 245 ポンド(約 110 kgs)のタイ類が漁獲された。
3. 結論として、カムベチエ・バンクは、散在する岩礁や岩場の場所を除けば、タイ類、ハタ類のトロール漁場として良好であることがわかった。

操業漁場図



9. メキシコ湾側の漁港

メキシコ湾に面する漁港は、現在、北からタムピコ、トウспан、ベラクルス、アルバラードシウダッド、カルメン、カムベチエ、ユカルベテン、プログレソ、の八港で、最も施設のよい漁港から書くと、アルバラード、ユカルベテン、ベラクルス、カルメン、カムベチエ、タムピコ、トウспан、プログレソとなる。

1. タムピコ港

タマウリパス州にあり、可成り大きな規模で操業が行なわれている。缶詰工場が一つある。然し、漁港施設は中等である。

2. テッスパン港 (TUXPAN)

ベラクルス州にあり、ボラの水揚地として有名である。小型トロールも行なわれている。然し漁港施設は不完全である。

3. ベラクルス港

ベラクルス州にあり、漁港であるとともに、商港であり、軍港である。商港として、太平洋側のアカブルコ港とともに、メキシコ合衆国の二大商港の一つである。この附近は、タイ類、エビ類、サワラ、カマス、その他の魚類が豊富で、首都のメキシコ市へ鮮魚を供給する主要な漁港生産地として重要である。ベラクルスは缶詰工場が2つ、冷凍工場が2つある。港湾施設は商港として繁栄している関係上、漁港としては不完全な点が多く、少しも改善されていない。

4. アルバラード港

ベラクルス州にあり、エビの根拠地であるとともにメキシコ湾内における唯一の漁獲生産物の集散機関となっている。ベラクルスが商港専用となるに従い、当局は、ベラクルスの代りに、ここに専用の漁港を1964年に新設した。オランダからの借款1億2千万ペソを投資して建設されたこの漁港は、たしかに、メキシコ湾はおろか、メキシコ全国の中でも屈指の漁港であろう。漁港の施設としてはほぼ完全な姿をそろえている。メキシコの漁港視察の中で、絶対に欠くことの出来ない場所である。

5. シウダッド、デ、カルメン港

カムベテエ州にあり、エビ生産の根拠地として非常に重要な漁港であるが、その施設は完全なものではない。エビ冷凍工場が数ヶ所ある。

6. カムベテエ港

カムベテエ州にあり、カルメン港とともに、メキシコ湾内で最も繁栄しているエビ漁業の基地である。然し、漁港施設は完全ではない。

7. ニカルベテン港

ユカタン州にあり、プログレスでは避難出来ない多数の漁船の避難港として、人工的にこの港を建設し、同時に、冷蔵、冷凍、製氷、加工工場を棧橋のそばに建設した。港の出入口に若干の問題が残っており、目下鋭意浚渫を急いでいるが、何れにせよ、メキシコ湾内におけるアルバラードとともに完備された漁港の双壁といえよう。

8. プログレン港

ユカタン州にあり、直接、外洋に面しており、300メートル位の長い棧橋が沖に向かって突出しているのみで、漁港施設としては原始的なものに近い。今や、漁港としての機能は、隣りのユカルベテン港の方へ移っている。

1.0. エビ漁業

メキシコ合衆国のエビ漁業の歴史は極めて古く、スペイン人による征服より遙か以前から行なわれていた。然し、エビが商業ベースに乗り、更に国際的に商品化されるように出世したのは、1930年頃からのことである。

1. (1930年)アメリカが、カリフォルニア湾内のグアイマス及びトボロバムボの沖合でトロールの操業を開始した。
2. (1934年)日本水産が、大型冷凍船及び新型トロール船で、メキシコ湾岸、カリブ海、太平洋岸のエビ資源の開発に従事した。
3. (1939年)メキシコ政府は、外国漁船の操業を禁止した。
4. (1940年)漁業者と仲買人がアメリカからやって来て、エビ漁業の拡張に乗り出した。
5. (1941年)メキシコ人所有の二つの冷凍工場が、グアイマスとトボロバムボの両港で操業を開始した。
6. (1945年)アメリカの漁船が、カルメン沖で、エビの新漁場を発見し、メキシコ湾内におけるエビ漁業は急速に発達した。そして第二次世界大戦終了後、俄かにエビ景気が起り、メキシコ湾内の繁栄と相俟って、太平洋岸でも、冷凍工場が飛躍的に増加した。
7. (1958年)太平洋岸のエビ漁業は更に一段と繁栄した。

1940年頃、漁業者と仲買人がアメリカからやってきて、カリフォルニア湾のグアイマス及びトボロバムボを前進基地としてエビ漁業に従事、次第に事業を拡大し、仲買人の手を経て、生鮮エビをアメリカの缶詰工場へ送り込んだ。そして、ここに冷凍工場が建設され、冷凍品としてのエビがさかんに輸出され、エビ漁業による利益が大きいところから、メキシコ人投資家達が漁船の建造、冷凍工場の建設などに着手、着々とエビ漁業の基地としての基礎が出来あがっていった。

現在、エビ漁業の重要な基地は、太平洋岸のグアイマス、マサトラン、トボロバムボ、サリナクルス及びベナスコの、以上5漁港で、メキシコ湾岸では、カルメン、カムベチエ及びタムピコ

の3漁港である。

漁港別水揚量の百分率

太平洋岸

Gnaymas	}	50%
Mazatlan		
Topolobampo		10%
Salina cruz		7%
Penasco		7%

メキシコ湾岸

Carmen		85%
Campeche		8%
Tampico		7%

地域別にみると、次のとおりである。

1. 太平洋側は、カリフォルニア湾の生産が60%を占めている。
2. メキシコ湾内は、Campeche bankの生産が93%を占めている。

エビは、政府が漁業協同組合の経済的基盤を育成するために、組合に独占排他権を与えている8品種の中の一つで、エビ漁業に従事する者は、必ず組合員でなければならぬ。然し、組合自身が所有している漁船は、太平洋側で30%、メキシコ湾側では僅かに5%に過ぎず、その他は、企業者が所有している自己の漁船を組合に貸す形をとる。

MARINE PRODUCTS WHICH CATCHING IS
PROHIBITED EXCEPT COOPERATIVE MEMBER

メキシコ名	和名	学 名	生産州(主要)
LANGOSTA	イセエビ	<i>Panulirus Interruptus</i> <i>Palinurus species</i>	Baja California Yucatan
ABULON	アワビ	<i>Haliotis fulgens</i> <i>rufesens</i>	Baja California
OSTION	カキ	<i>Crasostrea virginica</i>	Veracruz Tabasco
CAMARON	エビ	<i>Penaeus species</i>	Sinaloa, Sonora Campeche
CABRILLA	ハタ類	<i>Mycteroperca species</i>	Baja California Sinaloa
TORTUGA	海ガメ	<i>Lepidochelys olivacea</i>	Guerrero, Oaxaca Jalisco
TOTOABA	トトアバ	<i>Cynoscion macdonald</i>	Sonora Baja California
ALMEJA	ハマグリ	<i>Tivela stultorum</i>	Baja California

エビの冷凍工場は、勿論、エビの生産地に設置されており、太平洋側とメキシコ湾側とに大体同じ数ぐらいがみられている。

太平洋側

Mexicali
Matancitas } Baja California

Gnaymas
Penasco 州 } Sonora 州

Topalobampo
Mazatlan } Sinaloa 州

Salina cruz (Oaxaca 州)

メキシコ湾側

Tampico (Tamaulipas 州)
Coatzacoalcos
Alvarado } Veracruz 州

Ciudad del Carmen } Campeche 州
Campeche

幾たびも繰返しているように、太平洋側における、マグロ類、イワシ類のまき網漁業とともに、メキシコ湾側のエビ類トロール漁業は、現在、メキシコ合衆国水産業の中の二大双壁漁業である。このメキシコ湾側のCiudad del Carmenは、太平洋側の Ensenada がまき網漁業の中心繁栄地である如く、メキシコ湾側のトロール漁業の中心繁栄地である。

このCarmen と Gnyamas と Mazatlan にエビの冷凍庫が最も多く、何れも、歴史的にみて、これらの漁港がエビ漁業の発祥地であったし、エビの主要生産地であって、ここに冷凍工場が集中していることは蓋し当然な話である。これ等の工場の大部分は、メキシコ人によって経営されているが、一部分、アメリカ資本によるものもある。然し、メキシコ人による工場と雖も、アメリカ人の技術者或いは管理者のいるところが多く、依然、技術的にも資本的にもアメリカへ依存している傾向がうかがわれる。

Ciudad del Carmen のエビ漁業の根拠地としての繁栄は現在も依然続いており、この市を訪れた人の眼に、この市の光栄ある simbol としてのエビの巨大な像が、市街地の中心広場に、天空へ聳え建っている珍らしい像が映る。この市の全経済の殆んどがエビ産業に依存していることがうなづかれる。

11. エビ漁業の資源と漁場

メキシコの沿岸で漁獲されるエビは、クルマエビ (*penaeus japonicus*) 属に属するものが主体で、その生活史は、沿岸に近い海で産卵が行なわれ、孵化後、15~20日を経過して稚エビとなり、それから沿岸から湖沼、潟、入江などへ移動を始める。これ等の水域が稚エビの成育場である。その後、4~8週間を過してから、河やクリークや湾の方へ移動し、それから1ヶ月後に外海へ現われる。全長13cm位になるまでは、じっと、とどまっているが、その後は海岸に平行して若干の回遊を行ない、或は水温の変化に従って深淺移動も行なう。回遊の範囲は余り広くない。

エビ漁業の漁場は、付近に大量の淡水が流入する入江、湖沼、クリークなどが広がっていることが条件で、浅くて広い地域がエビの好漁場となる。この点、メキシコ合衆国内には、このような条件に適した大陸棚が、メキシコ湾にも、太平洋側にも存在していることは天与の恩恵とでもいうべきか。

メキシコ湾で漁獲されるエビは次の三種である。

1. White shrimp ... *penaeus setiferus*
2. Brown shrimp ... *p. aztecus*
3. Pink shrimp ... *p. duorarum*

White shrimp

他のエビと比べ、沿岸性で、水深15尋以内が主要漁場である。昼間に漁獲される。

Brown shrimp

White shrimp より沖合に生息し、水深40~50尋の深部で漁獲される。夜間に漁獲される。

Pink shrimp

水深15~20尋が漁場である。brown shrimp が泥質に棲むのに対し、貝殻、砂などを好む傾向がある。夜間に漁獲される。

これ等の3種類のエビは、フロリダ半島からユカタン半島に及ぶ、アメリカ、メキシコ両沿岸のメキシコ湾全域に、広範囲に分布している。この水域における、これ等を漁獲する漁法の、イニシアチブを握っているアメリカのエビトロールは、1945年、アメリカ漁業局が開発した、カムベチエ、バンクの新漁場を主要漁場として進出、もって今日に至っている。これ等のエビ回游については、今のところ、タマウリパス州からアメリカ合衆国にかけて広範囲な水域を移動することがわかっており、春の間に海岸に沿って北上し、秋から冬にかけ、テキサス州からタマウリパス州へ向って南下することが認められている。

Grooved shrimp という種類は、White shrimp よりも黒いため、アメリカの市場では容易に受け入れられなかったが、政府の熱心な運動が効を奏して実を結び、その需要が増大し、この漁業が発達し、その増産はようやく軌道に乗るようになった。現在、この漁業が最もさかんに行なわれている水域は、アメリカ合衆国のグランデ河とカムベチエの間の、約30~100尋の水深の漁場である。

エビ類の生物学的、資源学的研究は、アメリカ、メキシコ両合衆国において活発に行なわれており、例えば、エビと降雨量との相関関係が研究された結果、降雨量の少ない年には生産が少なく、雨の多い年には生産が多いということがあきらかにされている。

メキシコ合衆国は、エビ資源の増大を図る目的のために、河川水の調整や、沿岸の湖沼の条件の改良に関する試験などを、熱心にすすめている。又、毎年1回、アメリカ、メキシコ両合衆国は、エビに関する合同会議をひらいている。

メキシコ海産エビ全部クルマエビ *panaeidae* 属に属していることは前述のとおりであるが、商業ベースに乗っているエビの種類が、太平洋側のもものとメキシコ湾側のもものとが異なっている。その商品名は同じである。

太平洋側で漁獲されるエビは次の四種である。

1. Blue shrimp ... *penaeus stylirostris*
2. White shrimp ... *penaeus Vanamei*
3. Brown shrimp ... *p californiensis*
4. pink shrimp ... *p brevirostris*

Blue shrimp

太平洋岸ではどこでも発見されるが、Salina - cruz の沖合及び Mazatlan の北部水域に最も多い。昼間に漁獲される。市場で喜ばれる種類である。

White shrimp

カリフォルニア半島の太平洋岸を除く、太平洋岸全水域で漁獲される。15尋以浅が主漁場である。Mazatlan から San blas との間に最も多い。昼間に漁獲される。市場で喜ばれる種類である。

Brown shrimp

太平洋岸ではどこでも発見されるが、主な漁場は15～30尋のところ、夜間に漁獲される。

Pink shrimp

カリフォルニア半島を除く太平洋側の全水域で漁獲される。主な漁場は20尋以深で、夜間に漁獲される。

12. エビ漁業の漁具漁法

メキシコ合衆国のエビ漁業は、メキシコ湾側のトロール船がフロリダ型であるのに対し、太平洋側のそれはカリフォルニアのマキ網型である。漁具は両者ともオッタートロール網を使用している。即ち、オッターボード2組による複式トロールの方式で、両舷にブームを張り出し、2組の網を同時にひらいて曳網するやり方である。

使用される漁船は、20～70トンの範囲内の大きさのものが主であるが、100トン型の船も使用されている。特徴は、操舵室からリモートコントロール方式で、直接機関の動きを操作し船長は、漁労長であるとともに機関長でもある場合が殆んどである。70トン型の機関には大体300馬力の高速エンジンが入っている。

漁具は普通、45 feetの網が同時に2組使用される。オッターボードの寸法は、普通、長さ

34 inches, 高さ32 inches, 厚さ / inches, スキーの幅6 inches である。オッターボードは漁網の袖に直結される。漁網の袖は短い。網の高さは非常に低い。沈子網には扱き起し用のチェーンがついている。特に目につくことは、操業曳網中、左右のトロール網の中間に try net と称する10 feet 位の小型の網が同時に曳網されることである。小型のオッターボードもついている。これは曳網中、海底において、2組の、本体である左右の網の少し前方の中間をすすみ、漁獲の状況、障害物の有無などをしらべるために、半時間位の間隔で、揚げたり入れたりする。

乗組員は、普通4～5名である。

小型船の場合是一般海の所要日数は4～5日、60～70トン級の場合のそれは、15～20日位である。

漁獲量は平均して、小型船の場合で年間20～25トン、大型船の場合が40～50トンとみなされている。

メキシコ湾で操業する場合は、秋から冬にかけて強い北風（一般にノルテと云われ嫌われている）が連吹し、幾日も港内に停泊を余儀なくされる場合がある。

メキシコのエビ漁業には、次の三種類の漁法が現在行なわれている。投網、梁、オッタートロールである。他に、特殊なものとして、例えば次の様な漁具漁法が、マンサニーヨでみられた。竹で編んだ簀の子を水中に、円筒状に建てる。エビが狭い入口からこの中に入ってきて住みつくようになるのをまって、捕獲する。

投網

丸木舟（カノア）に、2～3名が乗りこみ、その中の一名は漕手である。半農半漁が殆んどで最近では舷外機 outboard engine をとりつけて操業する者が多くなった。

投網は直径15 feet位の大きな網であるが、極めて軽くて強い。重さは沈子のせいである。漁獲のよい深さは一般に、7尋前後であるといっている。例外を除き一般に、夜明け前に出発し、午後帰って来る。氷は使用されない。

梁

この漁法の歴史は極めて古く、スペインの統治以前（16世紀）から一般に普及していた。

主に Mazatlan と Sanblas の間の河口で用いられている。漁期は夏と秋である。半農半漁の者が殆んどである。

梁は、翼、身網、囲い、の三部分からなる。

大きさは、100 m位のものから数キロに及ぶものもある。梁は、河口、入江を塞ぎ、海へ向

って移動するエビを捕獲する。好漁時は、新月と高潮の時が一致している時である、といわれている。原始的な漁法であるにも拘わらず、年間3,000トン以上の漁獲をあげている。

前記2種類の漁具漁法は、所謂原始的な漁業に属するもので、何と云っても、オッターロール漁法による操業こそ、メキシコ合衆国エビ漁業の本命であり、エビ漁業を支えている主要な柱であるといっても決して過言ではない。

13. 漁業協同組合

メキシコの漁業法の中を貫ぬいている、二つの基本的な思想を絶対に見逃すことは出来ない。その一つは、“天与の資源は国民全体のものであり、充分に保護された上で、われわれの手で捕獲されなければならない。”そして他の一つは、“海は漁民のもの、土地は農民のもの、漁業からの収益は公平に分配されなければならない。”

漁業協同組合（以下単に組合と書く）は、このような民主的な漁業法の、基本的な思想に基づき、漁業の民主化の中心的組織として、1930年頃からつくられるようになった。そして既に40年の歳月が経過した今日、組合の功績は果して何であったか？水産資源の効率的な利用のために充分な役割を果たしたかどうか？われわれの共有の資源を外国資本に奪われなかったか？貧困と無知と不安定な生活から漁民を解放し救い出すことが出来たか？漁民の指導的役割を果たしたかどうか？

解答は残念ながら、次の様な、諧謔的な比喩だけである。それは全国いたるところで、聞かされた耳なれた言葉であった。

“組合はタコである”

漁民たちはこういっている。要するに、タコが獲物を取り押えているように、沢山の足でメキシコ全土を押えつけ、足の先についている吸盤で、自分の好きなように吸いとっているからである。組合は自分の利益のことしか考えず、勝手に魚の値段を吊りあげて売れなくし、収益をむさぼり独占し、漁民のためになることを何もしていない。組合の存在は寧ろ漁民にとっては敵であり、メキシコの水産業を民主的に発達させることから背をむけている。

結論からさきに書いてみると、私の観察は次のとおりである。

1. 最大の欠陥は、水産の専門家が組合にいないこと。この問題は即水産教育の普及につながる。
2. 組合には、国家から強大な権利が与えられていて、8品種の独占排他権を持ち、これにより一定の収入を得て、経済的に安定しているため、これ以上の事業を積極的に拡大強化していこ

りとせず、現状の位置に安住し、給与の増大のみを考え、労組的色彩を強くしている。

3. 組合自体の事業活動を積極化し、拡大強化していこうとする肝腎な組合の業務の執行能力に対し、組合役員に選挙される人達が下層の漁夫達であるため、その能力に欠けていること。つまり、組合の運営について、執行機関に果して十分な管理能力があるかどうか？

何れにせよ、メキシコの組合は、日本人が抱えている組合の常識では理解が出来ないが、少くとも現行の組合に改革の一大鉄鎚を加える覚悟を抱く必要がある。

1930年頃より漁業の民主化の中心的組織としての組合の結成が始まり、その後、政府の政策もあって漸増し、1960年(昭35)頃から急速に全国に浸透し始めた。組合の運営は、漁民によって選挙された役員が主体となって運営、その役員は下層の漁夫たちが選ばれる場合が多い。一般に、各組合や漁民は、資本が不足している場合が多い。いろいろな理由で経済事業に進出している組合は、極めて僅かである。政府は組合を育成し、漁民の所得を増大させるために、特に、8品種(前掲)について、漁業法により、組合に独占排他権を与えている。これら8品種は、現在、漁獲上、極めて重要なweightを占めており、best tenの中、1位、3位、5位、9位、10位を占めているほどである。これら8品種を漁獲するためには、当然、組合員とならなければならないが、組合に有利な条件での操業とならざるを得ない。8品種は、沿岸の底着性資源、磯資源のみに限定されているのではなく、沖合に生息し、漁船の行動範囲も極めて広く大きな権利が偏って組合に与えられているのではないかと首をかしげざるを得ない。このように、大きな権利が与えられているにも拘わらず、一部の組合を除く殆んどは、組合活動らしい動きを示していない。このことは、少くとも生産の拡大からみて好ましいものとはいえない。前述のように役員には選挙により下層の漁夫たちがなる傾向にあり、一方、経営の才能や技術的にすぐれた人達が組合の指導者になることが少ないため、積極的に事業を拡大し、これによって組合活動の活発化を図ろうとする意欲に欠けるきらいがある。

14. 消 費

次の表から判断できるように、国内消費量は、毎年、年を追って増加している。

消費について、非常に問題になることは、人口750万人を抱く大都会の首都メキシコ市内の消費量が年を追って急激に膨れあがっていくのに対し、地方農村の消費量は、人口増加の割合には増加していない。

食用水産物の国内消費状況

(単位 千トン)

年次	国内生産量	輸入量	輸出量	国内消費量
1959	107	2	39	70
60	121	2	42	81
61	131	2	47	86
62	130	2	46	86
63	155	1	47	109
64	154	1	42	113
65	161	1	36	126
(推定)72	250			200

(註) 千トン以下の数字は便宜上四捨五入した。

国内消費量の算出は次の算式による

(国内生産量+輸入) - 輸出

メキシコ合衆国の総人口は1970年の国勢調査の結果、4,838万人と算定された。

1972年の推定総人口数は次のとおりである。

$$(4,838 \times \frac{3.3}{100}) + 4,838 = 4,997.6 \dots \dots 1971年度$$

$$(4,997.6 \times \frac{3.3}{100}) + 4,997.6 = 5,162.5 \dots \dots 1972年度$$

都市に住む人口と地方に住む人口との比率の差は、次第に大きくひらいていく傾向にある。

1970年の国勢調査の結果、その比率は次のとおりであった。

都市に住む人口比率 58.6%

地方に住む人口比率 41.1%

1972年における両者の比率は6対4であろう、と推定できる。故に、1972年における都市の人口と地方の人口は次の様に推定される。

都市に住む人口 5,160万人×6割=3,096万人

地方に住む人口 5,160万人×4割=2,064万人

人口1人当たり年間消費量について、さまざまな見解があるが、最も控え目を数字として、私は次の様な数字を採用したい。

都市に住む人口1人当り年間消費量……8 kg

地方に住む人口1人当り年間消費量……3 kg

1972年における推定年間消費量は次の様に算出される。

都市に住む3,096万人×8kg=247,680トン

地方に住む2,064万人×3kg=61,920トン

合計 309,600トン

故に、1970年における国内消費量の推定は約31万トンで、これに対し、国内生産量は推定約25万トンと想像され、約6万トンの不足である。即ち、メキシコ合衆国の国民は、1972年において、約6万トンの食用魚を食べることから妨げられたことを意味する。然し、前記、1人当り年間消費量の8kg或は3kgは、国民の保健上から算出された摂取必要量であって、実際には、この数字どかりに消費されると思ったら飛んでもない間違いを生ずる。つまり折角生産された食用魚が、右から左へ、滞貨なく売り捌かれていけばよいのであるが、専ら、いろいろな悪いデータの悪循環のために、結果的に魚が売れない。メキシコの国民は決して魚を食べない民族ではない。国民の人種的構成は、スペイン人とインディオである。スペイン人は、ヨーロッパ大陸において、魚食国民の筆頭である。インディオは、東洋人の血統である。メキシコ人が、魚を食べないという考え方は根本的に誤りで、魚を売れないようにしている、と私はみている。

政府は、第2次世界大戦の終戦の翌年から、国民に対して魚食普及のキャンペーンを組織的に展開しているが、大統領が就任するたびに、笛を吹くのだけれど、誰も結果的にはおどっていない。それは極めてあきらかな理由のためで、即ち、女性の肌の荒れを治療する場合と同じで、荒れた肌にいくらクリームを塗っても、荒れた肌はなおらない。体内にある原因となるものをとりのぞかない限りはなおらない。

国内に潜在する、いろいろな悪いデータを改良しない限り、魚食普及のキャンペーンは実効を奏さないであろう。

1970年度の水産統計の中で、政府当局は次の様な解説を述べている。

Mexico's waters abound with fish, but the lack of a fishing tradition keeps exploitation low, aggravated by the fact that consumption is minimal with little diversification.

The average annual growth rate in the 1960 - 1970 period was 2.2 percent. Nevertheless, there was a 10 percent increase

in the last year. This resulted, in part, from a 32.7 percent jump in the catch of shrimp which had been declining for the two previous years. Eatable fish, such as anchovies, and sardines, as well as some species for industrial purposes, also advanced.

ハイウエーを疾走してきた氷結トラックは、メキシコ市内の小売市場の中で、運んできた鮮魚を待期している仲買人に渡す。そこでは、セリは行なわれぬ。この仲買人に渡す価格は、既に生産地で、積込まれた時に相談できめられている。その中には運賃も手数料も含まれる。

監督官庁である商工省は、鮮魚の小売価格について、公定価格表を店頭に掲げさせている。然し、実際には殆んど遵守されていない。2倍以上の価格で売っている時もある。

輸出向水産物が、比較的恵まれた投資と近代的装備のもとで、漁獲されているのに対し、国内消費向けの食用魚は、その殆んどが、零細漁民の、原始的なカヌー（丸木舟）で、刺網、一本釣、投網、曳網などの原始的な漁法で、沿岸水域の極めて限られた漁場内で生産されている。それ故に、前者が最産可能であるのに対し、後者の生産量には限界がある。然し、後者の一本釣で漁獲される、タイ類、イシナギ、ハタ類、スズキ類などは、体長1米に及ぶ魚類が多く、これ等の魚類が市場の店頭でずらりとならべられている光景は誠に壯観の一語に尽きる。1週間後に同じところに、同じ魚がならんでいたこともしばしばみられた。然し、これ等の漁類は、恰も獣肉の様に、長期間の貯蔵に耐え、従って、鮮度のことや、悪臭のことも、余り気をつかう必要がないことは、大きな発見であった。

15. 輸 出 入

メキシコは、中南米諸国のうちでは、最も開発もすすみ、国民所得の水準も高く、貿易政策の重点が工業化の推進に置かれ、経済の一層の発展を期している。その貿易政策としては、輸出については、国内需要を充たすために必要なもの以外は積極的に輸出へまわし、輸入については消費材を出来るだけ国内生産で賄ない、どうしても不可能なものについてはのみ、その輸入を認め、工業化に必要な生産材を積極的に輸入する方針をとっている。

この方針に基づき、水産物の場合、エビを始めとする高級品の輸出を奨励し、スペイン系の血を持った人種が特に嗜好するタラの様なもので、どうしても国内では生産が不可能なものについて

のみ、輸入が許されている。

輸出水産物は、磯資源に属する、アワビ、イセエビ、海藻、タイ類、ニベ類、底魚資源に属するエビ類、そして回游性資源に属するイワシ類、マダロ類である。云うまでもなく、これ等の諸品目の中で、エビ類は、首位を占め、然も二位以下の合計を、85:15の割合で引き離している。それ故に、輸出量の変動はエビの豊凶に直接大きく左右されている。輸出の殆んどはアメリカ向けである。更にまた、アメリカがクシャミするとメキシコがカゼをひく、のたえのように、アメリカ側の一方的な価格形成が行なわれているので、アメリカの景気動向の影響を受けやすい弱身を、どうすることも出来ない。メキシコ政府は、このようなアメリカ商業資本を徐々に排除する方向にすすんでいる。日本も、メキシコエビを相当量輸入しているが、米国を通じこの間接輸入である。これは、いたずらに米国商社の利潤を増加させ、日本側にとって不利であり、日本商社は直接輸入を希望するけれど、アメリカとメキシコとの歴史的経済的な結びつきが強固で、さすがのエコノミックアニマルも拱手傍観の呈である。

輸入の筆頭は魚粉で、その次がタラである。このほか、ウナギ、カキ缶詰、冷凍イカなどがある。

魚 粉……ベルー、米国

タ ラ……ノルウエー

ウナギ……フランス、ポルトガル

カキ缶……日本

イ カ……スペイン

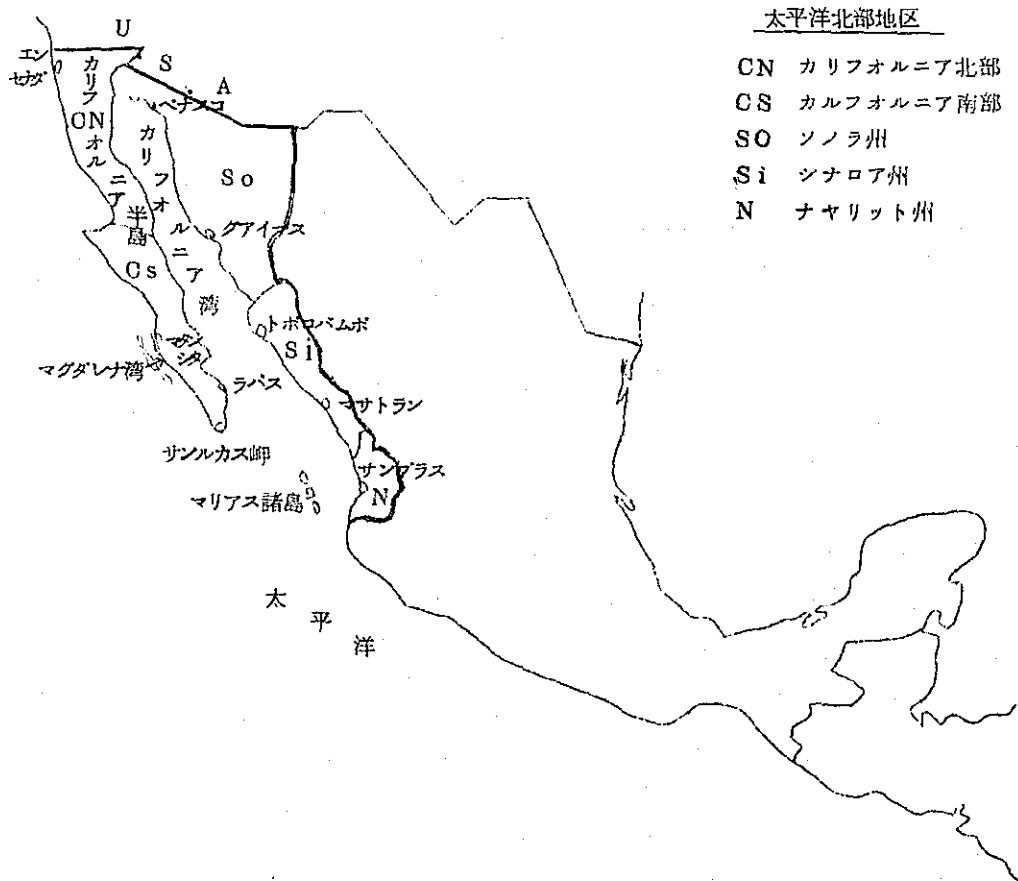
ウナギはフランス、ポルトガルから輸入しているが、隣国のキューバでは、ごく最近、キューバ政府の科学局が、キューバ島内の河川を調査し、そこに夥しいウナギの稚魚が、ウナギを食べることも知らないキューバ人達によってコヤシ代りに墾耕地にまかれているのを発見し、目を丸くして驚ろいたそうである。若し、それが真相であるならば、仲の悪いアメリカならいざ知らずメキシコなら、このウナギを大量に本土へ輸入することも決して不可能なことではなく、大西洋をはるばるわたって輸入されるフランス、ポルトガルなどよりは、遙かに地理的に有利なはずである。ウナギの消費なら、世界の中でも横綱格の日本と、企業合併でも計画してみてもどうか？

16. 実態調査報告

メキシコ全土に亘る各地を訪問し、実際に見聞した水産業の実態を紹介し、漁業の発展方策を考究し、今後の水産政策の重点となるべき方向を具体的に調べてみよう。

日本本土面積の、5.3倍強もある広大なメキシコ全土の、実態調査旅行は、便宜上、次の5地域に区分して実施された。

1. 太平洋北部
2. 太平洋南部
3. メキシコ湾北部
4. メキシコ湾南東部
5. ユカタン半島



1. 太平洋北部

この区域に所属する州は別図のとおり次の5州である。

カリフォルニア北部州

カリフォルニア南部州

ソノラ州

シナロア州

ナヤリット州

各州の主なる漁港は次のとおりである。合計は8港である。

カリフォルニア北部州……エンセナダ

カリフォルニア南部州……ラ、パス、マタンシタ

ソノラ州……グアイマス、ベナスコ

シナロア州……マサトラン、トボロバムボ

ナヤリット州……サンブラス

(1) カリフォルニア北部

この州で特に印象的であったことは、マグロのマキ網漁船の訪問と、テングサ採取業で活躍しておられる田中氏の姿であった。漁港エンセナダは、メキシコ水産業の二大双壁の1つ、マグロ類、イワシ類マキ網漁業の基地である。マキ網の船長は次の様に語った。船長は勿論漁労長兼業で所謂 skipper という肩書である。年令43才。アメリカの船に乗り、アメリカ人から技術を習得した。

「双眼鏡と肉眼で鳥群を発見してマグロ群を知る。5分で魚群をまく。55分で揚網する。漁具は、マグロ群の場合は500米×54米、イワシ群の場合は300米×30米。1航海所要日数は平均20日。年約7～8航海。年間操業7ヶ月。修理その他5ヶ月。1ケ年平均漁獲1,300トン(魚有類)最大の悩みは、老朽船であること。」聞けばこの船の船令は既に30年を超えているとのことであった。然し、私を非常に驚ろかせたことは、漁船から陸揚げ作業中にみた漁獲物のきたないことと、きずの多いことであった。もう少し、取扱いを丁寧にしてはどうか、と提案する私に、自分も同感であるが、乗組員の意識がまだ充分でないので、と船長は語っていた。

田中氏の、テングサの営業は好調の様で、1トン約400～500ドルで取引きされているとのことであった。

この太平洋北部水域は、メキシコ総水揚量の6割近くを占める、いわばメキシコ水産業の

ドル箱的地域で、各州の生産量の百分比をみると

Baja california 北	55%
Baja california 南	10%
Sonora 州	9%
Sinaloa 州	23%
Nayarit 州	3%

なかでも、漁港エンセナダを持つ Baja california 北州の生産量は全体の半数以上を占め、最も重要な水域であることがわかる。勿論、この主体は、前記マグロ類、イワシ類のマキ網漁業である。この州の水域には、このほか、カツオ、ブリ、サバ、カマスなどの回遊資源が豊富である。田中氏の説明によると、カツオの定置網を敷設し、その漁獲には大成功をおさめたが、漁獲カツオが全く売れず、事業としては大失敗に終わったそうである。エンセナダには、イセエビとアワビの研究所がある。この地域の特徴は、大型船を用いて高い生産性を示していることである。

(2) カリフォルニア南部

この州で、特に印象的であったことは、O.T.C.Aの三崎研修所で研修を受けたゴンサレス氏が校長をしているラバスの水産学校の訪問と、歴代大統領の中で最も水産業の発達振興のために熱心であったロベス、マテオス大統領の遺産であるマタンシタ港の訪問と、州知事専用のセスナ機に便乗し、空の上から、帝国の連合艦隊が収容出来るという、広大なマグダレナ湾を視察したことである。

この州を代表する漁港は、ラバスとマタンシタ港であるが、マタンシタ港の方が漁港らしい漁港で、ラバス港は漁港というよりメキシコ本土とカリフォルニア半島とを連結する ferry boat の発着港として、むしろ商業的に重要な港で、従って、水産関係の施設といえは、水産学校、国営冷凍庫、水産研究所ぐらいのものであろう。

ラバスには英仏の混血が多い。それは、ここが海賊の根拠地であったためである。常時、市街はアメリカ人を主体とする観光客で膨れあがっている。アメリカ人の殆んどは、sport fishing を楽しむために来訪した人達である。

国営冷凍庫で、運良くイセエビを積載したトラックが入って来た。たくさんのイセエビの中から最も大きいものをえらび出して計量してみると、長さが42cm、体重が2.5kgあった。勿論、私の生涯を通じて最も大きいものであった。これらのイセエビは、マグダレナ湾から266キロの道路を通して搬ばれてきたもので、平均3日毎に1トン半位の割合でこ

して、はこばれて来るとのことである。

ラバスの研究所では真珠貝とエビを研究していた。

この洲の漁業はこれから発達する段階にある。特に次の4地域の将来性は明るい。

1. ロベス、マテオス港の別名あるマタンシタ港の港湾設備と漁港施設が整備されるに従い、ここを基地とする諸漁業の発達振興が考えられる。私が訪問した時、今日からアワビの缶詰工場が生産を開始した、と工場長が語っていたが、アワビヤイセエビのためにのみ、この漁港がいつまでも利用されているようでは嘆かわしい。
2. マグダレナ湾の開発は最も期待されている。鯨が湾内を遊弋し、イワシ類、エビ類を豊富に産する。湾内に大規模なイワシ缶詰工場がある。
3. カリフォルニア半島の最南端はサンルカス岬で、アメリカ人のsport fishingを楽しむ人達でホテルは常に満員盛況、支払いもマナーも全部アメリカシステムである。ここに、設備の完備したマグロ類を主体とする缶詰工場が、専用棧橋まで備えて横たわっている。工場の中を歩いている私は、メキシコにいる自分を忘れていた。この岬の周辺は、マグロ類を始めとする速洋性回遊性資源に富むので今後の開発が大いに期待されている。
4. ラバス港から更に、カリフォルニア半島の東海岸を北上すると、海岸の屈折、大小の島嶼が散在し、瀬戸内海の様な美しさである。この水域が、未だ、磨かれざるダイヤモンドとして放置されている。開発が遅れている最大の理由は、メキシコ全国の至るところで発見されている。所謂、道路網のないことである。資源的には、サワラ、カツオ、ボラ、イワシ、アジ、ブリ、サバなどの回遊性魚族から、タイ類、ハタ類、スズキ類、ニベ類、イシナギ、カレイヒラメ類に至るまで、実に豊富である。

ラバスの市場で調査した魚価（1970年2月）

	⊖ 38ペソ	⊕ 28	⊕ 18	1キロ当り
エビ				
アワビ	18			〃
蛤貝	18			〃
タコ、イカ	12			〃
海ガメ	⊖ 8			〃
サメ塩干肉	10			〃
スズキ類	12			〃
イシナギ	12			〃
ハタ類	12			〃

国営冷凍庫買入れ価格（1971年5月）

スズキ類	3.50	1キロ当り
タイ類	2.50	〃
イシナギ	3.50	〃
ハタ類	3.50	〃
ニベ類	3.00	〃
カレイ類	4.00	〃
サワラ	2.30	〃
カツオ	2.00	〃
ボラ	1.50	〃

国営冷凍庫の能力調査

冷凍料	1キロ当り	1ペソ（但、少量の場合）
賃金	日給男工	35～40ペソ 女工 30ペソ
		（8時間勤務）
冷凍能力	1日	15トン
冷蔵庫収容量		150トン
製氷	1日	10トン

知事公室で知事と懇談した時、知事は特に水産教育の重要性を指摘し、ラパス水産学校の内容を充実するつもりであると語った。

ラパスの水産学校は、商工省が持っている4校の中の1つで、1972年現在、1年生が55名、2年生が16名、3年生が12名である。

生徒1名に対し、政府から1日4.5ペソの食費と若干の小使銭が支給される。教科書、ノート衣服は全部官給、全員寮生活である。生徒は全国から集まっている。勿論、地元の生徒が一番多い。教員の数は、校長以下14名である。

この学校に配属されている実習船は、1971年末現在、3隻で、1972年には、70トン級のエビ船が配属される予定であった。3隻の中で最も大きい実習船は次のとおりである。

船名	CHICOME
造船所	ASTILLEROS RODRIGUEZ S.A. ENSENADA, B.C. MEXICO.
造船年月	JUNIO - 1966 (昭41.6)

総噸数	1 0.9 7 TONS
登簿噸数	7.2 3 TONS
船 長	1 2m
船 幅	3m
機関製作所	WATER BEKER , LONDON
機関種類	DIESEL
馬 力	1 3 0馬力
回 転	2,5 0 0 /m
速 力	8 KNOTS
消費燃料	2 0立 / h
満タン量	7 0 0立
航続時間	3 5時間
航続距離	2 8 0里
乗組員	4名
所属官庁	COMMISSION NACIONAL CONSULTIVA DE PESCA

(3) SONORA 州

この州で特に印象的であったことは、グアイマス港の訪問である。グアイマス港は、ペナスコ港とともに、ソノラ州の2つの漁港の1つであるが、グアイマス港は漁港施設の点で全国的に知られている優秀な漁港である。

カリフォルニア湾の水産資源は極めて豊富である。もともと、この湾のつき当りのところにコロラド河という大きな川が、栄養に富む化学物質を湾内に放流し、この為に、水産資源は大いに繁殖した。ところが、アメリカ側は、この河に数ヶ所のダムをこしらえたため、水流は著るしく減少し、従って水産資源は甚大な影響を蒙った。然し、依然、エビ類、イワシ類は多く、この州の水揚金額は、州別では全国第一位を占めている。それは、沢山の入江や湖水が稚魚の成育に適しているからであろう。この州に属する島嶼は、ハタ類、スズキ類、タイ類、ニベ類などが盛産し、イセエビも多い。サメ、サワラ、ボラ、マグロ、アジ、海ガメ、などの表層魚類も豊富で、アサリ、タコなどにも恵まれている。ダム建設は、養殖事業に興味を惹きつける結果となり、いろいろな養殖計画が立てられている。グアイマスには、カキの養殖場と、真珠貝とエビの研究所がある。

(4) シナロア州

この州で特に印象的であったのは、マサトランの生物調査研究所の訪問と、エビの藤永博士の勸告が実効を奏しているLaguna del caimaneroの視察であった。

この州は、数多い海岸沼のために、エビの繁殖がさかんで、従ってこの州の主要生産品はエビである。広い大陸棚はまだ生産を増加させるのに十分な余地を残している。カキ繁殖の適地が多く、O. T. O. A. から派遣されて、実際に繁殖試験を実施したカキ専門家は、結局、その試験地をこの州下に選んでいる。

大規模な灌漑施設や運河のたまりで、いろいろな種類の淡水養魚がさかんに行なわれている。

マサトランの水産生物調査研究所は、最近メキシコには珍らしく、漁場調査のための業務をF. A. O.の技術援助の協力で、西ドイツから寄贈された研究船フンボルト号を用いて開始するようになった。その対象資源は、トロール漁業で漁獲されるものであるが、この州が、マグロ類資源に富むと考えられているマリアス諸島を中心とする大円形内の漁場に、地理的、基地条件的に最も有利であることから、マグロ類の漁獲についても、熱心にその調査研究が計画されている。またこの研究所はエビとカキについても研究をすすめている。

マサトランは、造船所が有名で、エビ漁業が、カリフォルニア湾で繁栄するに従い、この造船所もエビ漁船の建造で同様に繁栄した。マラカイボにあるベネズエラ会社は、6隻のエビトロール船をここで建造し、また、東京の東洋シュリムプk.k.は、72 feetのエビ漁船5隻の建造を発注している。この東洋シュリムプk.k.の船をつくることになったとき、地元の新聞は「世界に冠たる水産王国日本が、わがメキシコの技術を認めて発注した」とセンセーショナルな発表をした。

世界的なエビ研究の泰斗、藤永博士は、1967年の夏、FAO主催の「shrimpの生物学的飼育に関する国際会議」に講演を与えるために、招聘を受け、メキシコ合衆国を訪れた。藤永博士は約1ヶ月の滞在期間中、シナロア州下の有名なエビの繁殖lagoonを視察し、貴重な勸告を残して帰国されている。

(解説)

Laguna del Caimanero は、最も深いところでも2米の水深で、水温は25℃である。問題点の所在は、その、海の方にひらいている出入口にある。この出入口には瀬があって、1年のうち、雨期の8、9、10(9月を中心とする約2ヶ月)の高潮の時に、稚エビがどっと湖内に流れ込む。雨期が過ぎて乾燥期に入ると、次第に塩分が濃くなり、4、5、6の3ヶ月間は、水が無くなって塩田に変る。従って、8月頃から海水が浸入し、湖内に流れ込む

だ稚エビは、3ヶ月後に、市場価値のあるエビとなる。

藤永博士は、乾燥期間中に附近の河から水を入れことを勧告した。その結果、エビの生産は従来の8倍に増加した。

マサトラン市場における鮮魚の価格調査

(1969年3月 単位1キロ当り)

サワラ	5ペソ
スズキ類	10
ニベ類	7
ボラ	3
イカ	5
カジキ	10
クロダイ(尾)	1
エビ	24
イシナギ(ファイレー)	12

(5) ナヤリート州

この州の海岸線は240軒、大陸棚は約2,200平方軒であるが、原始的な漁獲が行なわれているのみで全くの未開発の州である。漁獲量は5,000トンを超えない。その3割はカキである。

この州に河口を持つサンチアゴ川を始め、淡水魚類の生産及び養殖に適した広い水域を抱いているので、海洋資源のマグロ類、サワラ、サメなどの開発と相俟って、この州の漁業発展の将来性は決して暗いものではない。然し何と云っても、先行条件となるものは、道路網の完備であらう。

2. 太平洋南部

この区域に所属する州は別図のとおり、次の6州である。

ハリスコ州
コリマ州
ミチオアカン州
ゲレロ州
オアハカ州
チアパス州

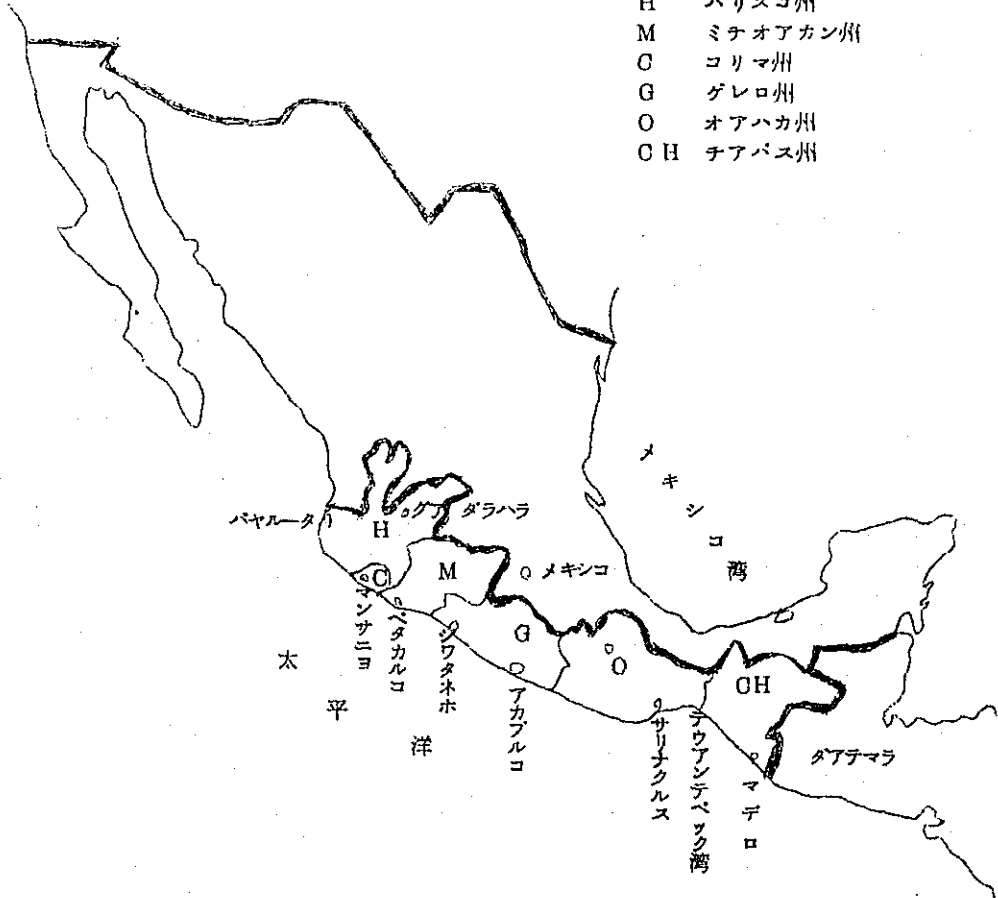
各州の主なる漁港は、次のとおりである。その合計7港である。

- ハリスコ州 バヤルータ
- コリマ州 マンサニヨ
- ミテオアカン州 ベタカルコ
- ゲレロ州 シワタネホ, アカブルコ
- オアハカ州 サリナクルス
- チアパス州 マデロ

この地域の特徴としては、オアハカ州を除いて、漁業活動があまり活発ではなく、零細漁民による原始的な漁法が、依然行なわれており、未開発の水域が非常に多く、全国総水揚量に占める割合は、僅かに6%程度に過ぎない。オアハカ州は、水産資源の非常に豊かなテウアンテ

太平洋南部区域

- H ハリスコ州
- M ミテオアカン州
- C コリマ州
- G ゲレロ州
- O オアハカ州
- CH チアパス州



ベック湾を持ち、全国的に有名なサリナクルスという漁港を繁栄させている。各州の生産量を百分比をもって比較してみると

Jalisco 州	12%
Golima 州	15%
Michoacan 州	2%
Guerrero 州	22%
Oaxaca 州	33%
Chiapas 州	16%

オアハカ州に次いで、生産性の高い州は、グレロ州である。この州は、海岸線が長い割合に大陸棚の面積が狭く、荒々しい岩礁や、ヤシの突の残骸で海底が埋めつくされているといった水域が多く、従って資源も、回遊性魚族と磯資源のみに頼らざるを得ない。然し、世界的に有名な観光地アカプルコを擁し、その比較的活発な消費の刺激をうけて、生産がさかに行なわれている。

この州で特に、印象的であったことは、マンサニヨの足立氏の訪問であった。金物雑貨屋を経営している足立氏は、日本の遠洋マグロ漁船の、このあたりの水域の agent を引き受けており、意外に沢山の日本のマグロ漁船の入港のために、今では、どちらが本職かわからないいいそがしさであった。

この地域の水産業を検討する上において、絶対に見逃すわけにはいかない海洋漁場学的条件がある。それは寒暖両流がこの地域で合流することである。学者は、グレロ州のシワタネホの沖が南下してくる寒流の限界である、と語っていた。シワタネホ(黒い女と云う意味)は、それ故に、日本の銚子である、と私は考える。もっと繁栄してもよいと思うし、するはずであると確信する。ところが、行ったことのある人でないとわからないが、交通事情が物凄く悪い。これでは発達の方から顔をそむけてくるだろうと思われた。このことは然し、なにもシワタネホだけに限った問題ではなく、マカプルコを除く、他の漁港は交通的に全く孤立しており、幹線道路は漁村から遠く、漁業活動の停滞を余儀なくさせられている実態である。この地域の総漁獲量が全国の僅かに6%程度であることの原因の大半が、このあたりにある、ということを実に物語っている。

(1) ハリスコ州

この州の水産開発は、メキシコ合衆国2番目の大都会グアダハラを持っていても拘わらず不振である。この最大の理由は、交通網の不備である。この大都会と太平洋との間に險阻な

山岳地帯が南北に横たわっているためである。然し、最近、バイルータ港（飛行機は僅か15分で、バイルータ、グアダラハラ間を往復する）に通ずる観光道路が開通したので、最早、文明から隔絶された所謂ナベット感から解放され、水産業の開発は急速に活発化することが予想される。バイルータ港は現在、sport fishing で繁栄している港町で、1日200尾のカジキが釣獲され、全国一を誇っている。このホテルでは、メキシコ語で部屋があるかときくと無いと云うが、英語できくと直ぐにあると答える。

グアダラハラ観光の中に、欠かすことの出来ないルートの一つが、チャバラ湖遊びである。観光と抱き合せているのが、この湖水で隣産する「白い魚」と呼ばれる淡水産の鮎に似た魚である。メキシコで、私は、このチャバラ湖の白い魚と、バックワロ湖の白い魚と、トルーカ街道に面しているニジマス養殖場のニジマスの、舌がとろけるぐらいに美味なあの味は、忘れようとしても忘れられるものではない。然しこのチャバラ湖の白い魚にも、深刻な問題がある。この湖上で楽しむアメリカ人観光客と、湖畔に別荘を持つハイソサィティーの連中から、操業を締め出されていることである。観光か、水産業か、歴代の大統領と雖も解決の出来なかった、水産業の発達振興の正面に大きく立ちはだかっている、解決至難な重要且つ根本的な大問題である。

(2) コリマ州

この州の水産業は、隣接するハリスコ州とミテオアカン州と一衣帯水の、同様の海洋漁場学的条件下にあるにも拘わらず、比較的、海産魚類の開発がすすんでいるわけは、マンサニヨ漁港のおかげである。ここに、商工省の4つの水産学校の1つが置かれているのも、将来の有望な開発が期待できるからであろう。

マンサニヨは、尾立氏のおかげで、太平洋側で操業している日本のマグロ漁船の、緊急入港が可能で唯一の避難港である。統計は古いが、1968年中に、マンサニヨ港に入港した船舶は全部で287隻に及び、その中に、日本のマグロ漁船の占める比率は18%であった。

外国船 287隻	}	日本の船 133隻	}	一般	82隻
				漁船	51隻
		日本以外の 外国の船 154隻	}	米国の鮎マキ網船	13隻
				その他	141隻

(3) ミテオアカン州

この州は、ハリスコ州と同様、メキシコ合衆国の中で、カリブ海に面するキンタナー州と

ともに、太平洋側で最も未開発の州である。漁港らしい漁港もなく、一応、ベタカルコと書くには書いたが、殆んど人はベタカルコを知らないと思う。私は、この州出身の偉大な政治家であり、元大統領であったミゲル、アレマン氏に囑望され、この州下の水産業開発計画を立案するために現地へ飛んだ。飛んだということは、決して急いでいたためではない。急がなくても、飛ぶ以外に現地へ入り込む方法がなかったからである。交通網がまるでゼロの世界である。然も乗換えて定員7名というセスナー機でたどりつくところである。ベタカルコは、地曳網の出来る砂浜の上に掘立小屋が数十戸散在している寒漁村で、桟橋もなければ水揚場もない。然し、ミナオアカン州下では重要な漁村である。

(4) グレロ州

この州で最も印象的なところは、アカブルコとシワタネホである。首都メキシコとアカブルコは、素晴らしいハイウエーが通っており、それは、西へ走ってシワタネホに至る。これほどの道路と消費都市を擁しているグレロ州の水産業の前途は、正に洋々たるものがある。然し現状は、極端な供給量不足に悩まされている。アカブルコの中央市場を視察した私は、メキシコ市に次ぐ、活気のある販売光景を目撃し、力強く思った。全国第二位の大都会グアタハラにはこの活気は見られなかった。アカブルコが消費地であるのに対し、シワタネホは生産地である。然し、シワタネホの漁港設備は誠に貧弱である。操業している漁船は、その殆んどが航外機を据えた丸木舟であるが、これらの漁船を砂浜の上に曳きあげて置く原始的な光景が眼につく。大きな船が用いられないのは、資源の側に原因があるのではなく、漁具漁法の導入普及に必要な、試験操業というものについて、政府当局に全く理解と熱意が欠けていることに因る。前述の様に、シワタネホ沖が寒流の限界であるといわれ、寒流は2月～5月にシワタネホの沖に現われるのが普通である。水温は次第に上昇し、カジキが獲れ始め、1月頃まで続く。そして寒流が現われ始める。

イセエビの生産は活発である。漁獲されているイセエビの大きさは、10尾で約8キロで、月産7トン(約9000尾)のイセエビを40人の漁夫がもぐって捕獲する。即ち、1人月平均225尾、1日平均7尾である。

アカブルコは消費の町である。そして常に供給不足に悩まされ続けている。この悩みを少しでも緩和させる目的で、アカブルコの郊外に横たわる通称トレスパロス(三つの湖という意味)の増産計画について、私は相談を持ち込まれた。私は幾たびもアカブルコを基地として、これ等の湖の実態調査を実施し、増産計画勧告書を政府へ提出した。

私がアカブルコに滞在中、或る朝、地元の新開が、次の様な、驚ろくべき、出たら目な記事

を発表していることを知った。

“日本の漁船が、12里以内で操業、1日1万トンのマグロ類などを漁獲している”。

これについて、駐在日本国大使館から、反駁の声明書をつくるための、技術的な資料を作製する依頼を受けた。この問題に関する、日本経済組合連合会長の談話は次のとおりである。
「今年（1972年）の10月に終る協定によれば、9里の線の外側で操業することが出来る。然し現在、日本のマグロ漁船が実際に操業している漁場は、カリフォルニア半島の周辺と、レビヤヒヘッド諸島（同半島南島より南南東約250里にある）の周辺の水域で、これ等の水域において、9里の内側に入らないよう注意深く操業しているが、良好な漁場は9里や12里のあたりには存在していない。その上、操業に従事している漁船は年間約30～40隻で、アカブルコの新聞が報道しているような事実は到底考えられない。」

この専管水域について、メキシコ合衆国の場合、次のとおりである。

「1966年10月20日、ディアス、オルガス前大統領は、1935年の法律を改正し、メキシコの漁業管轄権を、従来の9里から12里に拡大する法案に署名し、之を議会に提出した。1973年以降は、12里以内では一切、外国の操業は許可されず、また如何なる国の歴史的な漁業権も認められないだろう。」

(5) オアハカ州

この州は、テウアンテベック湾を含む広大な大陸棚を持ち、資源は極めて豊富であるが、既に開発されている資源は、この州の水揚高の93%を占める、豊凶の激しいエビである。

従って、他の資源を開発する必要に迫られているが、その具体的な方法について、当局は拱手傍観の呈である。ここでも、試験操業の実施が、強く早急に望まれている。

この州の主要漁港は、サリナクルスで、港湾設備も漁港施設もともに一級に属する、誠に良好な港である。この造船所には、数名の日本技術者が長期間滞在して、技術指導の業務に当たっていた。この技術者達はこんな話をしていた。「横浜丸」が応急修理のために緊急入港したとき、地元の新聞は「世界一の造船技術を誇る日本の船が、わがメキシコの造船技術に敬意を表して、サリナクルスのドライドックに入って来た。」

(6) チャパス州

この州は、隣国グアテマラに接している。沿岸にはエステロが多く、エビ、ボラ、サバヒーなどの資源が豊富である。隣州のオアハカ州の大陸棚に続く広大な大陸棚では、サリナクルスのエビ船団が操業しているが、この州は、まだ漁港らしい漁港を持っていないので、漁港の建設が呼ばれている。漁船の大部分は3トン以下の小舟で、現在、沿岸のエステロ周辺で、サバ

ヒー、ボラ、エビなどを漁獲している。又、原住民の生活のために、養殖事業をさかんに奨励している。

3. メキシコ湾北部

この区域に所属する州は別図のとおり、次の2州である。

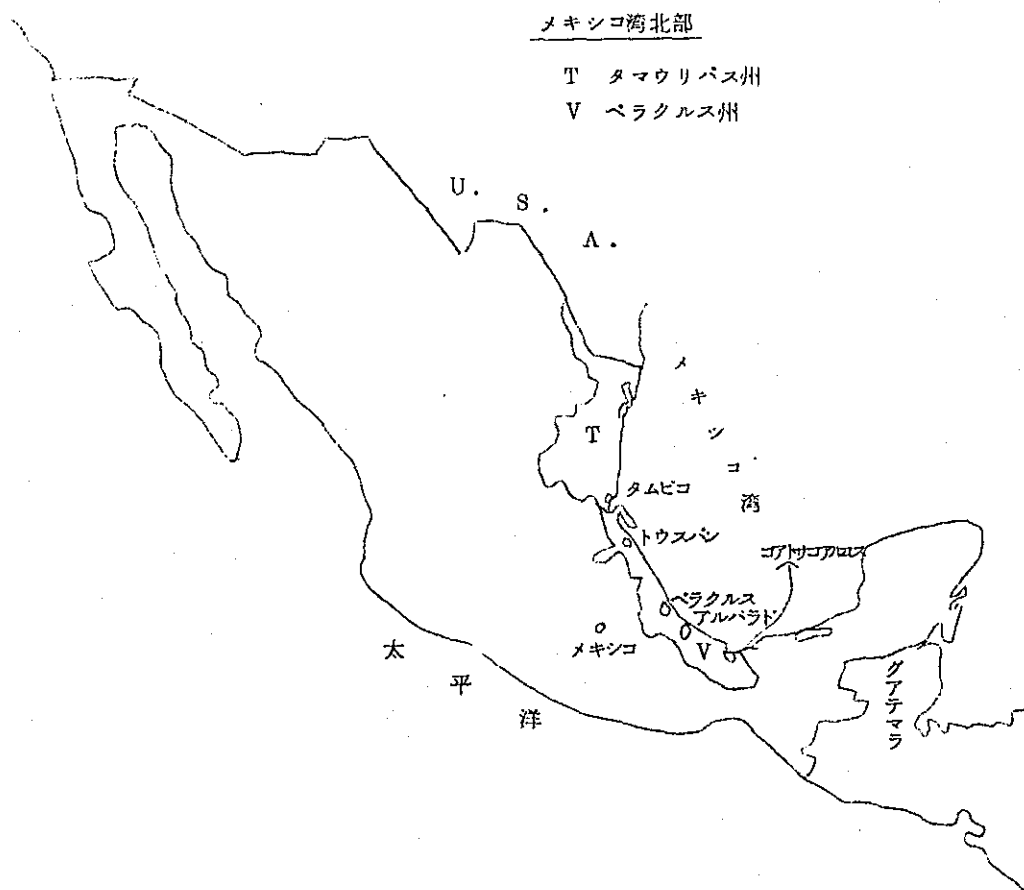
タマウリス州

ベラクルス州

各州の主な漁港は、次のとおりで、その合計は3港である。

タマウリス州……タムビコ

ベラクルス州……ベラクルス、アルバラード



両州の生産量を百分比をもって比較してみると、

タマウリバス州……………80%

ベラクルス州……………20%

この地域は、昔から、首都メキシコ市への食用水産物の供給地である。

この地域の特徴は、河川、湖沼が特に多く、エビ、カニ、カキ、ボラ、などの資源が特に豊富であることと、工業化、特に石油工業による河川、湖沼、沿岸、汚染のための資源減少が問題化されつつあることである。

(1) タマウリバス州

この州は、河、湖沼、沿岸、沖合の至るところに豊かな資源が存在している。この州はまた、広い大陸棚を持っており、ここに重要なエビのバンクがあり、その大部分は、アメリカ漁船が操業している。またこの州は、水産業界では全国的に有名なマドレ湖を抱き、更に、3本の河の流域に多数の人工湖を持ち、頗る水産資源に恵まれている。

マドレ湖は、少し前まではかなり良い漁獲量をあげていたが、泥の堆積という自然的な理由のために、著しく漁獲量を失った。この泥の浚渫作業が行なわれれば、エビ、カニ、カキ、ニベ等の増産が復活出来ると考えられている。

タムビコ漁港は、良い桟橋もなく、水揚場も貯蔵庫も貧弱で、もっとすぐれた施設を必要としている。

この州の潜在的資源は、未だその一部分しか開発されておらず、漁具漁法の改良普及と相俟って、建設中のマタモロス漁港が完成すれば、タムビコとともに、この州の沖合漁業への開発進出が可能となり、生産は更に一層伸びることが期待される。

(2) ベラクルス州

この州の漁港は、北から、トウспан、ベラクルス、アルバラード、コアトサコアルコスである。この州も河川が多く、淡水産、海産の資源が豊富である。河口の周辺は、ボラ、エビ、カニ、カキなどを富み、海産魚類の代表はサワラである。メキシコ市内で食べる殆んどのカキは、ベラクルスのカキである。サワラは、これまで地曳網で漁獲されていたが、日本の落網が使用されるに至り、漁場は一層沖合化した。

この州も、タマウリバス州のマドレ湖のように、タミアウア湖がある。この湖が有名なのは、全国一のカキ資源に富むからである。この湖へ行くには、TUXPANから自動車で行く以外に方法はないが、35軒の道路は、しばしば不通になるので非常に不便である。

TUXPANは、河口よりちよっと入ったところにある小さい町で、漁船用の桟橋、漁獲物

の水揚場、貯蔵庫などが完備されない限り、その発達は期待できない。

ベラクルスは、人口750万人を擁する首都メキシコ市へ、水産物を供給する漁港として重要であるが、主な水揚げ物は、カキ、サワラ、アジ、タイ類、エビ類である。カキはすべて天然の産物であって養殖カキではない。メキシコ全国で、養殖カキはまだ生産されておらず、すべては天然のカキである。サワラは、曳網のような原始的な漁法でさえ、年間大体3000~4000トンの漁獲をあげていたのであるから、その豊富な資源量が十分に想像され得よう。エビ類は主にアルバラード漁港で水揚げされるので、ベラクルスでは余り大量に取扱われていない。

ベラクルス漁港では、日本人の泉重光氏の活躍が有名である。40トン級のトロール漁船でエビとマグロを兼業している。

Trawl net (ナイロン製)	70 feet	2,900ベソ
	45 feet	1,800〃
Otterboard (一対)		1,800〃
Warp (曳網用ワイヤーロープ) ($\frac{3}{8}$)		4ベソ 20/m
水	1トン	100ベソ

漁獲されたエビの重量 10尾=300グラム

ベラクルスは、北風の強く吹く日が続くと、すべての漁業は休漁する。その北風の吹く季節は大体、11~4月である。

ベラクルス市場魚価調査(1958.11)

エビ類	kg当り	22ベソ
タイ類(大)	〃	15〃
スズキ	〃	15〃
タイ類(小)	〃	10〃
サワラ	〃	7〃
サメ	〃	6〃

魚市場の最大の悩みは、回転がおそく、消費が活発でなく、売れ切れないことである。1尾のサワラを、庶民は3日に亘って食べ継ぐ。初日は輪切りにして油で揚げる。2日目はナンパン漬にし、3日目は肉を取り、米やその他の穀類を混ぜて食べる。

ベラクルスには、文部省に所属する唯一の水産学校がある。

ベラクルス漁港は、その機能のすべてを、近くに新設されたアルバラード漁港にゆずりつつ

あるが、尚、若干の中、小型漁船が漁獲物を専用棧橋に水揚げしている。専用棧橋といっても、商港用棧橋の一部が与えられたものである。新設されたといっても、アルバラード漁港は、1964年（昭39）のことで、既に7年以上を経過している。この巨大な施設は赤字をかかえて悩んでいる。この漁港は、ほぼ理想的な、すぐれた施設を持つ、文字どおりメキシコを代表する漁港で、ユカタン半島のユカルベテン漁港とともに、メキシコ合衆国漁港の二大双壁をなすものである。接岸した漁船から陸揚げされた漁獲物は、ベルトによって屋内の処理場へ搬び込まれる。缶詰工場、燻製工場の原料となる以外の漁獲物は、商人に払下げられる。工場内には、アメリカやドイツの最新式の機械が据えつけられ、極めて高能率である。然し、最も重要な問題は、全工場の機械がフルに運転できるだけの原料魚が水揚げされない、ということ、メキシコでは「工場を建設してから魚をさがす」と冗談をいっていることをまるで裏書きしているかのようである。

アルバラード漁港で、トロール漁船の船長達と懇談した内容を要約して書いてみると、「総人口に対する家畜の頭数は、非常に不足しているから、食用魚を必要としている。特に、魚類は、人体に良質の動物性蛋白質を与えてくれる。国民はもっと魚を食べるべきである。それには、魚をもっと安くしなければ買うことが出来ない。10年前にくらべると、漁獲量は著しく減った。漁場をもっと拡大して操業すればよいのだが、それには、もっと大きい船が必要である。現に、自分達の目の前で、米国やソ連やキューバの大型トローラーが大量に漁獲している。然し、残念ながら、メキシコではそれが出来ない。先ず第一に、スキッパーになれるメキシコ人がいない。試験操業の名目で、よくドイツやフランスの立派な大型船が操業したが、彼等の船がおさめた成績に、メキシコ側はそのまま飛びついて行かない。船の大きさが違うのだ。それのみならず、彼等は、よい漁場をみつければ、それをかくしてしまう。メキシコ人は、自分の船で、自分の力で試験操業することが一番である。」

アルバラード漁港の真向いの小高い丘の上に、商工省に所属する水産学校がある。

この州の最南端に、コアトサコアルコス港がある。流れの早い河畔の一方側に、ひらけた港町が南の方へ延びている。河に面して、大きなレストランが、魚の料理を専門に店を出していた。魚獲物用の水揚棧橋は、このレストランと、隣の建物であるホテルとの間に設けられているが、10米位の貧弱な棧橋である。然しこの棧橋を改善する前に、当然解決しなければならぬ先決問題がある。それは、石油工場や砂糖工場からの、工業用汚水による汚染問題の解決である。

4. メキシコ湾南東部

この地域に所属する州は別図のとおり、次の2州である。

タバスコ州

カムベチエ州

各州の主な漁港は、次のとおりで、その合計は3港である。

タバスコ州 …… フロンテラ

カムベチエ州 …… カルメン、カムベチエ

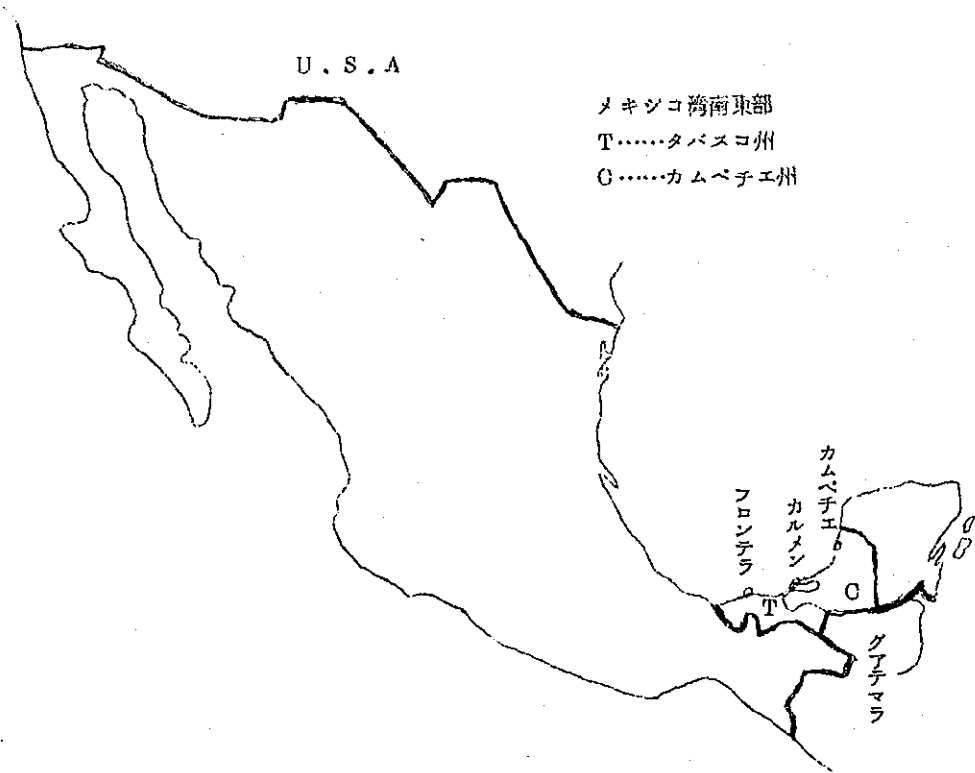
両州の生産量を百分比をもって比較してみると

タバスコ州 …… 15%

カムベチエ州 …… 85%

(1) タバスコ州

この州の特徴は河が多く、広い大陸棚にそそぎ、底曳網の操業に適しているが、エビの漁場として発達している。エビ以外の沿岸資源、アジ、サメ、カキ、ワニなども豊富である。私は



この州の知事の要望で、州下のサメ漁業の発達振興計画案を作製する目的で、この州の重要な漁業基地フロンテラを視察する機会に恵まれた。然し、フロンテラに到達するまでの交通が大へんなもので、これではいくら立派な計画案を作製しても、成功覚束なしとみた。むしろ、

「フロンテラに達する交通網完成三ヶ年計画」でも当局へ提出する方が先決であろうと考えた。

(2) カムベチエ州

この州は、河川に富み、大陸棚は広く、底曳網に適している。この州の経済は、エビ漁業及びその関連産業で支えられている。エビ漁の豊凶による不安定性に備え、エビ以外の資源の開発利用に深い関心を抱いている。

カムベチエ漁港の棧橋は立派である。100隻をこえるトロール漁船が舳い合せて、洋上のあちこちに碇泊している光景は、誠に壮观を眺めて、カルメンとともに、ここが、メキシコで最大のエビ漁の基地であることを、正しく裏書きしている。市街地からバスで、漁港棧橋行のバスに乗ると、バスは海岸線にそって走り、車窓の右側にこの様な光景が展開している。途中の反対側の丘の上で水産学校がある。水産学校は商工省に所属し、アルバードとともにメキシコ湾側にある2校の中の1校である。

カルメン漁港は、狭い水路の中にあるので、カムベチエのような展開した光景はみられないが、カムベチエよりも繁栄しているだけあって、狭い面積の中にトロール漁船がぎっしり詰っていて身動きも出来ない有様は、エビ漁業の繁栄をよくあらわしている。

5. ユカタン半島地域

この地域に所属する州は別図のとおり、次の2州である。

ユカタン州

キンタナロ州

各州の主な漁港は、次のとおりで、その合計は5港である。

ユカタン州 …… プログレス、ユカルベテン

キンタナロー州… ムヘレス島、コスメル島、ラエツマル

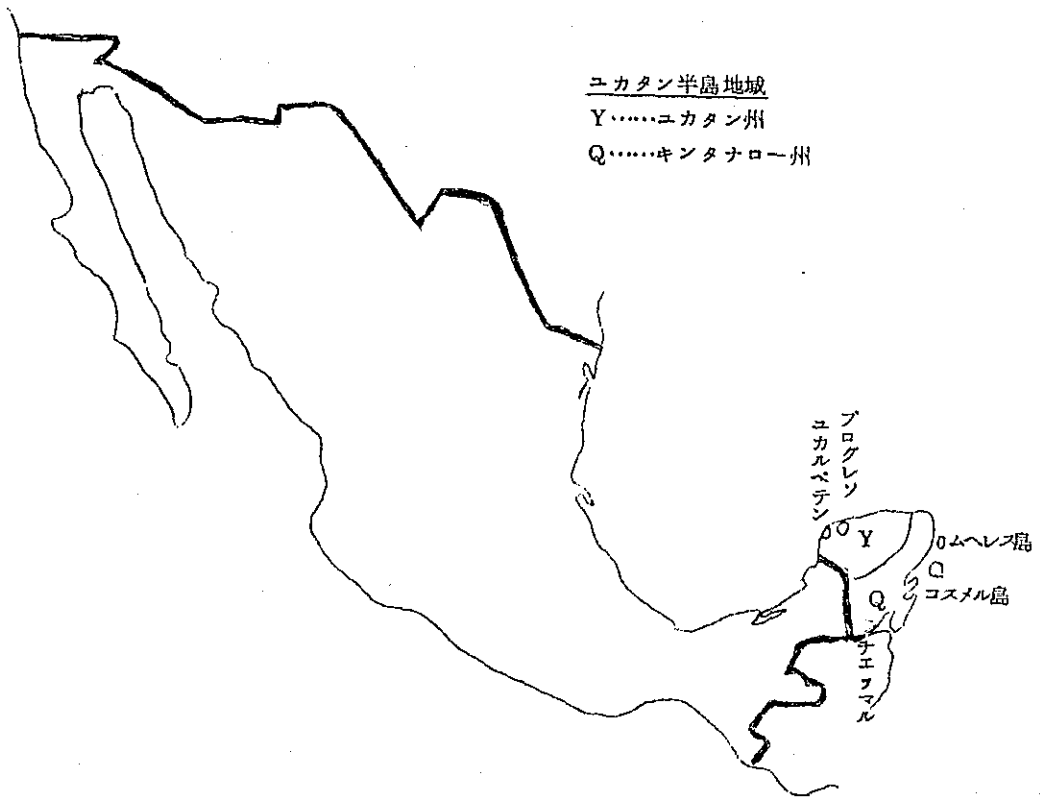
両州の生産量を百分比をもって比較してみると、

ユカタン州 …… 95%

キンタナロー州… 5%

(1) ユカタン州

この州は、エビ漁で著名なカムベチエ州に隣接しているので、エビ資源が豊富に発見される。然し、海底の条件が悪いために、トロールでは漁獲は出来ない。エビ、タコ、カニ、イセエビ



タイ類、イシナギ、ニベ類など以外の能率的な漁法でのみ可能である。一本釣漁法が最もさかんに行なわれている。州下の水域には、アメリカ、キューバの漁船がさかんに操業している。私は、州知事から、キューバの海賊どもがわが州の資源をとりあげている。彼等が用いている日本式の漁具漁法を教えて欲しい、と頼まれた。回游性資源、サワラ、カツオ、マグロ類、アジ、ブリ、イワシ類、サメ類などが豊富であるが、未開発のままである。

プログレソ漁港は、次第に、近くに建設されたユカルベテン漁港の方へ、すべての機能を移しつつある。

ユカルベテン漁港は、計画的に建設された漁港として、アルバラード漁港と好一対をなすものである。漁港施設はよく設備されているが、港の中は未だ浚渫を必要としている。この漁港基地の特徴は、缶詰も燻製もつくらず、フィーレ製品に主眼を置いていることで、フィーレの8割

以上を米国へ輸出。その需要は底なしのあかるさである。フィーレ製造のために100名の女工が働いている。フィーレと魚粕と魚皮が主要製品である。イシナギ、タイ類、サメのフィーレの生産量は年間1,200トンを超えている。サメの漁獲は年間1万尾である。この基地は、エビ船、タイ船、イシナギ船の三種類の漁法を用いる漁船が出入している。アメリカ船は、エビをとって来て、この基地に渡している。

エビ船は30トンの氷を積んで、1.5トンのエビを漁獲する。

タイ船は20トンの // 4トンの //

イシナギ船は6トンの // 2トンの //

この基地は、次の様な悩みがある。

1. 同じ漁期中、漁の豊凶が著しい
2. 新漁場発見の方法を知りたい

そして、一本釣とイセエビの専門家を日本から招きたい、と工場長は話していた。

(2) キンタナロー州

この州は全国で最小の州で、全人口は僅かに8万人、漁業者も僅かに300人に過ぎない。陸地には殆んど河川がなく、沿岸は、浅瀬、珊瑚礁、岩礁、堆、小島などが多く、海底は荒れているから底曳網は向かない。それからこの州には観光と水産で有名な2つの島、ムヘレス島とコスメル島がある。

現在、最も多い漁獲物は、イセエビと海ガメである。イセエビはアメリカ、キューバへ輸出される。

この州には、漁業活動をさかんにし、生産意欲を刺激する材料が乏しい。最も重要な問題は、輸送路の整備である。

チエッスル港、コスメル島、ムヘレス島の三漁港の中で、チエッスル港の施設が最もすぐれている。長い棧橋が100米以上も海上へ突き出し、漁船だけでなく、あらゆる種類の船舶が横付けしている。町の食堂ではカムベチエのエビをだしている。市場の魚屋は、1日の売上金が僅かに30ペソであると嘆いていた。購買力が乏しく、それは仕事がないからであろう。塩干魚が多い。漁船は150隻ある。然し最大で3トンを超えない。氷は1トン150ペソで他の地域よりは50ペソ高い。1966年の漁獲状況は次のとおりである。総水揚量は1,051トンで、その内訳は次のとおりである。

イセエビ 7, 8, 9月 44% 27ペソ

モハラ(黒タイに似た魚) 9, 10月 17% 3ペソ

海ガメ	周年	12%	
イシナギ	2, 4, 5, 6, 8, (2月)	8%	3ベソ
その他		19%	

海綿は、昔、非常に多かったが、乱獲で資源は涸渇してしまった。チエツマルは、この州の州庁所在地で、知事公室で、知事から次のような話しをきいた。

1. 有望な処女漁場が多い。
2. 技術と設備と船を持つことが発達の先決条件である。
3. 販路には、アメリカが控えている。

コスメル島は、本土のユカタン半島から、18キロの洋上にある、ferry で2時間の距離にある。面白いことは、この島では新鮮なもの、活着ているものがよく売れ、氷詰の魚だとか塩干魚などは余り売れない。魚屋が4軒、肉屋が5軒、鶏屋が一軒。肉は1キロ18ベソ、鶏は1羽19ベソで高い。

1968年の漁獲統計

イセエビの尾部	5,592キロ
海ガメの肉	1,600 //
小サメ	800 //
カマス	300 //
イサキ	250 //
その他	1,258 //
合計	9,800キロ

イセエビは、アメリカへ輸出、メキシコ市へ移出されている。

この島の漁業者は110名で、そのうち80人はイセエビの漁業者である。漁船は全部で8隻、然し大きい船がないので北風が吹くと、魚市場は1週間も続いて、1尾の魚もみられない日が続く。底質は珊瑚礁が多いので網の使用は無理である。この島全体の消費量は月平均3トン程度である。この狭い町のいたるところに、ホテル、食堂、商店の中に、日本のマグロ漁船の延縄用の硝子球が吊り下がっている。この島の周辺には、マグロの大群が時に、現われる-そうである。

ムヘレス島(妻の島)は、人口2,000人、その中で漁業者が110人。漁船は50隻。島の湾内には、海ガメ、イセエビの活洲がある。コスメル島から空路17分でこの島に到着、桟橋からferry で約40分、対岸の本土ユカタン半島へ行き、製氷、冷凍庫、イセエビの処

理工場に達する。製氷能力 8 時間毎に 2 トン

冷凍庫能力 10 トン

イセエビ捕獲用の籠の中に吊す餌として牛肉が用いられている。

イセエビの身と頭との割合は、3 : 7 である。

17. 結 言

1969年、私は、時間と予算の都合上、出来るだけ広範囲に然し浅く、メキシコ全土に亘る総括的な実態調査に従事した。それは、メキシコ政府の水産長官から、水産業の発達振興に対する意見の具申を求められたため、約6ヶ月の、全地域に及ぶ調査を済ませた私は、「メキシコ水産業に関する勧告」と題する、分厚い勧告書を、駐在日本国大使館を通じて、メキシコ政府へ提出し、そのcopyは、同大使より日本の外務大臣へ送達された。紙面の都合上、全文を紹介することは不可能なので、全文を構成する骨組みとなる、勧告10ヶ条について、次に掲載することを許していただきたい。

水産業の学問は応用科学であり、その発達振興が全般的な視野に立って考究されなければならぬものである以上、私の勧告もまた全般的な視野に立って考究されなければならなかったことは当然なことで、その内容は従って、今後いかなる勧告が提案されても、それは、この10ヶ条の勧告の中のどれかに属するものであるに相違ないと確信している。長官は、10ヶ条の勧告の中から、ラバスの水産学校の体質改善という業務を私に与えた。

1. PROBLEM OF THE WHOLE FISHERY FIELD

2. PROBLEM OF FISHERY EDUCATION

3. PROBLEM OF INCREASING CATCHING

1. PROBLEM OF THE WHOLE FISHERY FIELD

(1) To play role of General Director's consultant to solve immediately any subject submitted by him concerning all of the matters in the fishery field, and engage in the practical operation, if necessary.

- (2) To make up an ideal system of fisheries as a model case, extending over all the process through catching, distributing, and consuming in one state, in order to show what fisheries should be.
- (3) For the purpose of increasing the amount of the fish consumption, some improper matters should be taken up and improved concretely, going over carefully one by one all the process through between catching and consuming about the important species of fish.

2. PROBLEM OF FISHERY EDUCATION

- (4) To make a round of calls such as "a mobile training center" on the important fishing villages and give fishermen essential lectures on necessary knowledges and experiences, and also if necessary teach them more concrete technical training practically at the spot on the sea.
- (5) To make up an ideal fishery school which has a complete contents worthy to be truly fishery educational place in order to show as a model case what fishery school should be and should be done fundamentally.

3. PROBLEM OF INCREASING CATCHING

- (6) To try on increasing the amount of the production about the important species of fish, finding and exploiting new fishing grounds, improving the present fishing gears and methods, or introducing new modern effective fishing gears and methods.

- (7) To carry out the experimental fishing operation in order to increase the amount of the fish production in the continental shelf and inland waters.
- (8) To solve all the technical problems about catching the fish in one fishery research station which is already established.
- (9) To carry out the experimental fishing operation in order to improve the present fishing gears and methods, to introducing new modern effective fishing gears and methods and, to play role of guiding private fishing enterprises.
- (10) To solve the catching problem which gives the possibility of all-the-year-round working in one factory of fish processing, securing the raw material.

1970年12月、就任したエチオピア新大統領は、national fisheries の発達振興について、次の様に、その所信を発表している。

エチオピア大統領の水産政策

1. 水産貿易をさかんにして、外貨を獲得する。
2. 多くの国民特に貧しい人に、より多くの食用魚を供給する。
3. 漁村から失業者をなくすため、出来るだけ多くの漁業者に職を与える。

この大統領の水産政策は、メキシコ当局へ提出した私の勧告書の内容と全く一致している。即ち、三つの水産政策の基本となるものを分析してみると次のようになる。

1. 外貨の獲得
 2. 国民に食用魚を供給する
 3. 漁村から失業者をなくすために職を与える
1. 外貨を獲得するために、水産貿易をさかんにする。この目的を達成するには、水産物、特に輸出向け水産物の生産増大を図る以外にない。即ち、漁獲量の増大である。漁獲量を増大する方法は、洋の東西古今を問わず、次のとおりである。
 - (1) 試験操業による新漁場の発見開発
 - (2) 現行漁具漁法の改良
 - (3) 新規能率漁具漁法の導入普及

私の勧告書は、メキシコ合衆国の漁獲量の増大について、次のように勧告している。

- (勧告6条) 重要魚種別の生産増大について
- (勧告7条) 大陸棚、内水面の生産増大について
- (勧告10条) 水産加工場の周年操業を可能にする原料魚の不断の供給について。

2. 国民に食用魚を供給する

この目的を達成する方法として、次の2つの方法が考えられる。

- (1) 漁獲量を増大する。そして
- (2) 魚食普及運動をさかんにする。

私の勧告書は、この方法について、(1)の場合は、勧告5条、7条、及び10条で、(2)の場合は、勧告2条及び3条で、とりあげている。

3. 漁村から失業者をなくすために職を与える。

この目的を達成する方法について、私は勧告書の4条で、とりあげている。

さて、大統領の基本政策としてとりあげられている。これ等のスローガンは、決して、机上

や創造の産物ではなく、実際に、私自身が見聞し、痛感したものであった。

1. 私がメキシコへ派遣されたときの、要請のback ground は、「生物グループが水産行政全般を牛耳っていて、魚類の生産ということに関心が乏しく、国家的努力も払っていないそれで、日本から漁業の専門家を招いて、漁獲量を増大させたい」というものであった。実際問題として、関心は決して乏しくはなかったし、生産という問題が如何に重要なものであるかは十分に認識されていた。要するに、メキシコ合衆国4千万人の中に、漁具漁法の専門技術者が皆無という、厳しい現実に起因していた。これでは、いかに漁獲量増大を呼んでも、運転者のいない車のようなものである。

漁獲量を増大させる方法は、試験操業とか、漁具漁法の改良などがオーソドックスである。技術者の三段階、即ち、研究、応用、運用の中の、研究技術者は、メキシコ大学のような大学の中に講座を設けてつくりあげる。応用技術者は、水産学校の中でつくりあげられる。そして運用技術者は、訓練センターのような実業教育機関の中に、漁業者を入れてつくりあげる。当分の間は、水産学校出身の応用技術者と、訓練センター出身の運用技術者なら、つくり出せると思う。然し、水産学校にしろ、訓練センターにせよ、教える専門技術者の先生がいなければならぬ。然し、それは、政府がその気になりさえすれば、次の二つの方法で解決できる。

(1) 有望な人物を、先進国へ派遣して研修させる。

(2) 先進国から専門家を招号する。

2. 漁業者は、魚はたくさんいるけれど、売れないからとらない、とっている。

これは、生産意欲の問題に属し、直接、漁獲量の増大に対し、深刻な影響を与えている。資源が非常に豊富なメキシコのことであるから、たとえ、漁具漁法が改良されなくても、この生産意欲をたかめるだけで、何劇かの増産は可能であり、容易である。生産意欲がたかまり、魚をとろうと考える様に変っても、その魚が売れなければ、ブレーキがかかってしまう。そこで問題の所在が、魚をいかにして売るか、に移る。魚が売れるための、重要な二つの基本的な条件は、

(1) 魚食の普及

(2) 流通機構、特に道路網の完備と、生産地に冷凍冷蔵庫を設備することである。

3. 前述のように、メキシコ政府の中に、ピオロゴ、と称する生物学者のグループが、このような専門科学者が、水産行政の中で、引受けなければならない業務は、資源に関する業務全般であろう。メキシコ政府は、これら人的資源を、未だ適材適所的に十分に活用していない。

以上の3点から、私は便宜上、全体を次の三つのグループに分掌し、水産業の発達振興という

国家の大事業の役割を果たして行けばよいと思う。国家の大事業の役割、という抽象的な言葉が気に入らなければ、大統領が考えている基本的な水産政策を実行にうつすために、といいなおしてはどうか。

1. 漁具漁法グループ

漁具漁法の改良

先進国の能率漁具漁法の導入普及

新漁場の発見開発のための試験操業

教科書の作製普及及び講義とその実習

各州の要請に応じ、現地へ赴いて実習及び講習を行なう。

2. 魚食普及グループ

流通機構の整備改善

魚食普及の宣伝

料理の講習実演

モデル小売店の配置

加工魚の研究普通

エビトロールの副産物の活用

sport fishing の捕獲魚類の活用

3. 統計調査グループ

資源population dynamics に関する研究

資源計測法の実務

資源保護の実地教育

統計実務の講習

単位努力当りの漁獲量調査

重要魚類の生物学的調査研究

最後に、日本人が、メキシコの水産業のために貢献した記録のあとを辿ってみたいと思う。何といっても、その嚆矢となるのは、昭和9年頃、日本水産k.k.のトロー船による、メキシコの大陸棚におけるエビ漁場発見開発という壮挙のことである。この壮挙以来、メキシコ人が魚をよく食べるようになった、と言い伝えられている。このあと、昭和11年、金魚博士として有名な松井佳一氏が、メキシコを訪れている。カリデナス大統領のときである。湖水の調査、水産研究所をたてる話、漁業の問題、魚食普及運動など、政府のコンサルタント的な業績を残して帰国され

ている。(私の勧告1条の内容と一致)

戦後に入り、昭和26年水産大学を卒業した、泉重光氏が、メキシコ湾のベラクルスで、エビトロールとマグロ延縄の、すぐれた実業家として文字通り粉骨砕身、惜しむべし、1971年の師走も下旬、ベラクルスの自宅の近くで、無謀なメキシコ人の自家用車にぶつつけられて、昇天された。降って、昭和42年の夏、エビ博士として有名な藤永元作氏が、FAO主催の国際会議に招かれて渡墨されている。この時に、同氏の勧告が実を結んで、従来の8倍の増産をもたらすに至った業績は不朽のものであろう。翌年はメキシコオリンピックの年、この年の秋以降、日本政府は、O.T.C.Aを通じて、メキシコへ水産専門家を数名派遣している。これらの中で、ベラクルスの落網、クリアカンのカキ養殖、そしてラバス水産学校に於ける教育、などは顕著な業績となった。

ベラクルスの落網は、地曳網で年間4,000トンの漁獲が可能であったサワラの、回游経路が地曳網の届かない沖合であることに着目し、その魚道の一部に日本式の落網を定置して成功した。カキの養殖の成功は、次のようなback ground が理解されないと、その業績が、いかに大きいものであったか、の判断が難かしくなる。日本の専門家がやって来た時、メキシコにおけるカキ漁業の実情は、メキシコ湾側が9、太平洋側が1という比率で、天然産のカキが豊富に採取され市販されていた。養殖カキは皆無であったし、養殖の第一段階である、稚ガキの採取でさえも、まだ成功に至っていない実情下であった。同専門家は、宮城県の子ガキを空輸させ、約10ヶ月、海上に垂下の際、稚ガキを、平均重量8ヶ=1キロの大きさに育てあげた。全体の中でカキの身がしめる割合は、日本の場合、よくて10%に過ぎないのに対し、この実験では25%を示した。即ち、カキの身1ヶが、31.25グラムに成長したわけで、良好な結果である。

ラバス水産学校で教鞭をとった専門家は、みずから、スペイン語の教科書を作製し、生徒達に講義を与えた。水産通論、漁具材科学、刺網漁業、定置漁業、小型延縄漁業、小型底曳網漁業などが、与えられた講義の内容で、漁具材科学の実習として、編網、糸や網の結び方などが実地に指導された。また、実習船で海上へ赴き、O.T.C.Aから寄贈された漁具を用いて、刺網や延縄の漁業実習が実施された。刺網は、未曾有の漁獲記録を残し、「やっぱり日本の漁具はよい」という好評がひろまった。教育という、地味で地道な業務は、とかくその業績が目立たない場合が多い。帰国して2ヶ月後、同専門家が所属していた教育局長が「熱帯まぐろ資源に関する国際会議」のメキシコ代表として訪日された時、同専門家の自宅へ、同局長から速達が届き、至急会いたいとのこと。同専門家は、「またすぐに来てくれないか」と同局長から懇請された。くしくも派遣された専門家が、任地園から、再来が懇請されるような、業績を残したということは、専

門家にとって、これ以上の、名誉とよろこびはないであろう。

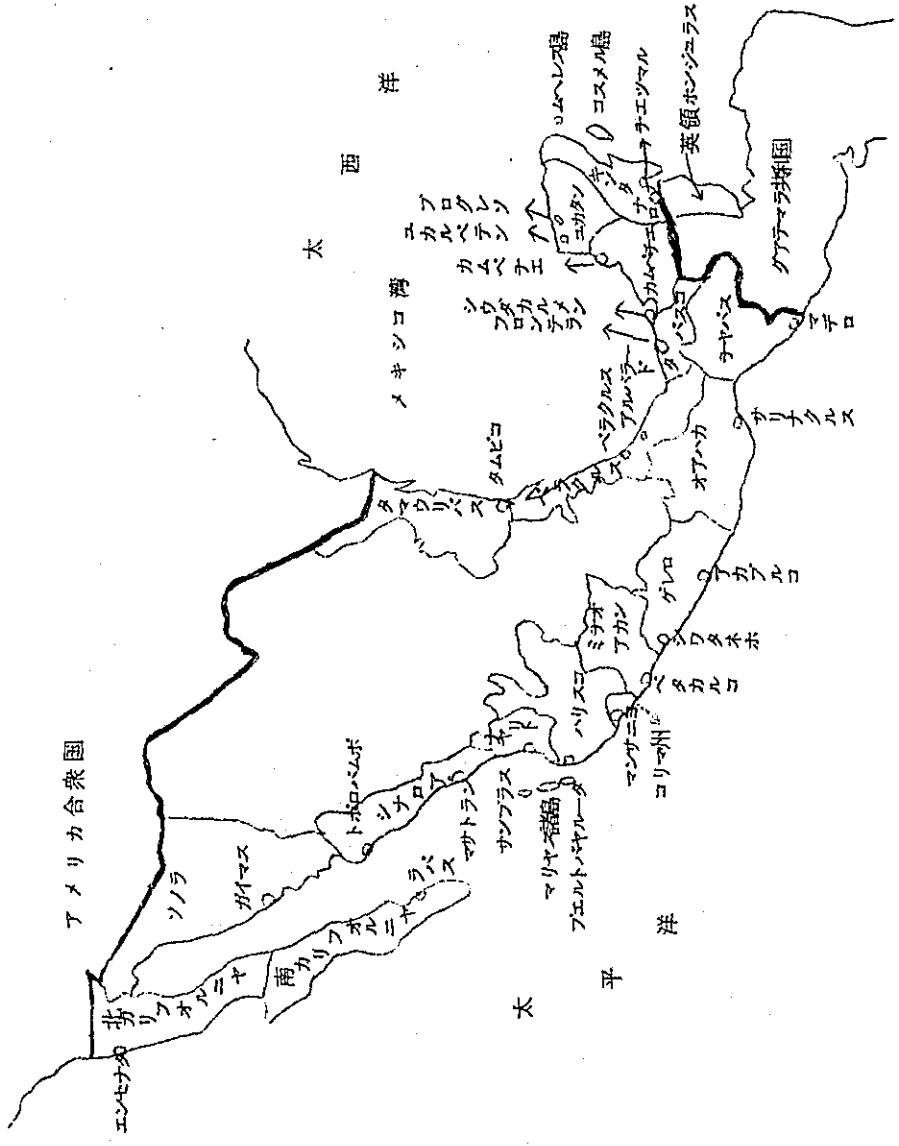
参 考 文 献

- メキシコ (日本国大使館編) 外務省
メキシコの統計 (メキシコ政府編)
FAOの統計書
メキシコのエビ漁業 (恩田幸雄) 日本水産資源保護協会
中南米のエビ漁業 Special Scientific Report NO 236
U.S. Fish and Wildlife Service
メキシコの水産業 (三島康雄) 海外技術協力会
メキシコ風土記 (松井佳一)
メキシコの沿岸漁業 (居城力) 海外技術協力誌 NO 209
メキシコ水産業に対する勧告書 (居城力)

調査に協力してくれた方がた

- BIOL AMIN ZARUR MENEZ アメリカ駐在漁業監督官
藤 永 元 作 国立市中2丁目22-41
増 田 正 一 日本鯉鮒組合連合会長





— 筆 者 紹 介 —

居 城 カ(いしろつとむ)

大正3年2月、新潟県村上市に生まれる。昭和13年、農林省水産講習所卒業。32年2月より2カ年、国連FAO漁業官。インド西ベンガル政府漁船隊総支配人。35年12月より38年4月までコロンボ計画漁業専門家としてマレーシア勤務。39年9月より43年3月まで中近東計画漁業専門家としてトルコ勤務。43年11月より46年11月まで中南米計画漁業専門家としてメキシコ勤務。

主な著書「鮪資源調査研究方法について」、「水産通論」、「漁業各編」、「漁船用実用航海術」等。

6
LIE